

浮かれた五条悟は死ね

moti—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

燦然と輝く二つの光！

それを背負う少女に入り込んだのは一般気狂いアホの子青年！

難儀な体質の銀髪オッドアイ（美少女）として生まれ変わった彼はかくて今日もこう叫ぶ！

「浮かれた五条悟は死ねー!!」

目次

| | |
|--|-----|
| かつこいいい五条悟は死んだ | 1 |
| 君はイカれたボーイ／ガール | 6 |
| 五条悟にスカイラブハリケーンを夏油傑と一緒にやろうとした過去があつてほしい | 12 |
| 日常を重んじていこうねという梨 | 18 |
| 反転術式三銃士 | 24 |
| あれ……この五条悟、浮かれてないぞ……？ 浮かれた五条悟とは一体……うごごご…… | 31 |
| ナナミンとGTGってLINE交換してるし2011年以降も交流あつたっぽいよねと思わなくもない | 39 |
| 2011年1月22日 土曜 | 45 |
| 呪いの考察は規模が大きいのでわからなくなる話。 | 50 |
| 近年でのかいことといえばって感じだよね。 | 56 |
| 大火 | 61 |
| 領域 | 69 |
| 「いつもどおり」の日常 | 78 |
| 2018年12月7日 土曜日 | 86 |
| 浮かれた馬鹿は死ね | 95 |
| 馬鹿なりの結論 | 106 |
| 祈の祈り | 123 |
| あとがき | 133 |

かつこいいい五条悟は死んだ

目を覚ますとTS踏み台テンプレ転生者になっていた。

ここまでの記憶はない。覚えもない。

すぐ近くにあった鏡を見たら、髪は銀色。かなり白っぽくもあるが。目は赤と青のオツドアイ。

どうしてオレがこんなことになっているのかさっぱり見当もつかないが、オレは天才だからさつくりと理解する。

「次回は百年後か……感謝の意を伝えねば……な！」

きつと神がオレを選んだのだろう。そういうことだ。これは明白なる天命。まにふえすと・ですていにー。

声は低め。男であった事情を考慮してだろうか。神様というやつはなんていい人なんだ。前世の冷蔵庫にある餅は全部あげます。

あんこが詰まってておいしいよ。

はてさて、自分自身のことについてすっかり理解できたなら現状把握のお時間だ。

周囲を見回す。

窓が鉄格子で覆われている。天才なオレは一瞬ですべてを理解した。

——監禁だこれ……。

文句なしに監禁であった。

自分の見た目が天に愛されすぎたものであるということは理解しているが、だからといってここまで嚴重にするものだろうか。

鏡に向かってポーズ。顔の横にピースを二つ。そして頬に笑みを象ってみる。

はい、かわいい。

これは人類史上最大のかawaiiさでないだろうか。

うん、間違いない。

オレは間違いなく美少女だった。

おわかりいただけると思うが、一般人が転生したときにすべきこと

というのは意外とわからないものだ。

だがオレは歴戦の転生モノ読者。

つまるところ、こういう際のテンプレートというのは自分の頭の中にしつかりと描いている。

テロリストが襲ってきたときの対処法なんかもきっちり考えていた歴戦のなろう読者なのだ。

こうした際にすべきことというのは、まず魔力だなんだの探知から始めるのだ。

オレの転生は見た感じ、比較的若い。

たぶん十三歳程度。

つまり訓練をするにはうってつけなのだ。

よし、なろう式の基礎力特訓やろう。

さっそくオレは魔力を探る。

鏡の前でやることにした。

椅子の上に胡座で座って、だ。

瞑想の途中で目をあけてもかわいいうオレの顔が見えるわけだし。

よし、そうとなったらさっそく魔力の訓練である。

がんばっちゃうぞ。

暇です。

魔力探知はできるようになりました。

自分の天才さが崇つて、一瞬で探知できました。今は魔力をぐるぐる回して遊んでます。

なーんも起こらねえでやんの。

退屈だ。

退屈は人を殺す。外に出たりはできないんだらうか。

ぼーっとする。

鉄格子がなければいいのになあ。そう思つて、じーっと睨んだ。

——なにかが放たれた。

それはまるで、なにかに食われたかのように、オレの目の前のものを消し飛ばして進んでいく。

外が見えた。

「……………」

え、なに。

ひよつとしてオレ、睨んだだけでこんなチートなもの出せるの？
やばくない？

遠くから聞こえる声。悲鳴。怒号。

違うんです、そんなつもりじゃなかった。

そう弁護しつつ、一方でオレの頭の中は『逃げれる』という思いで
いっぱいだった。

まるで自分のものじゃないかのような思いに突き動かされるように、そのままオレは外へと飛び出す。

とっさの思いつきで、魔力を体に纏わせる。

目に見えて速度が変わった。

やっぱりオレは天才かもしれない。いや、天才だ。

だからあっさりと、どこか古臭い門を走り抜けて、外へ外へと飛び出していった。

「おっと」

——そいつと出会ったのは、そんな折だったはずだ。

「そんなに急ぐと転ぶよ」

オレの腹に手を当てて、動きを止めやがった男。

オレと同じような白い髪。そして輝いているのは二つの蒼い目。

数瞬考えて結論を出す。

きつとこいつはオレの兄なのだろう。

エクセレントな解答だ。テストならきつと満点越えて五千兆点だろう。ふっふっふ。

しかしオレの天から賜った美しすぎる体にナチュラルに触るのは許せない。

「…………お気遣いどーも」

軽く睨んだ。

瞬間吹き荒れる、なにか。

忘れてた。

おそらく睨むことがトリガーだ。やっちゃまった。

あんな破壊を生むもの、人に向けたらどうなるかなんていうのはわかってる。

やべえよやべえよどうしようあそれどうしようとあたふたするのは一瞬。

オレの後ろに立っていた男が、ぽん、とこちらの頭に手を置いた。

「危ないねえ。僕じゃなかったら死んでたよ」

よかった、生きてた。

ほっとすると同時に、『どうやって?』という疑問が浮かぶ。

普通なら死ぬと思う。

なのに生きてるってことは、つまり普通じゃないということか。

「虚式」 が睨んだだけで発生する——だからこそその幽閉措置。

けどあの程度じゃ足りなかったみたいだね。ほとんど希薄だったはずの自我も復活したらしい。僕が戻ってきた理由としては、ちょうどいいくらいではあるけど」

「……?」

きよしき・むらさき。それがあのなにかの正体。

専門用語でオレにはよくわからなかったが、危険性だけはわかる。

普通、外に出したくはないはずだ。

だからといってまたあの場所に戻るというのもなんか違う。

オレは睨まないようにしながら、男のほうを見た。

努めて無表情。その成果が出たのか、例のむらさきとやらは出ることはなかった。

魔力を纏ってないのもよかったかもしれない。

こちらの顔を見て、どこかわかったように笑う男。

「大丈夫。心配しないでも、あの部屋には戻ることはない。僕に任せ
といてよ」

——しかしながら。

この男というものは、どうにもこうにもろくでもないところがあ
る。

それなりにちゃんと考えてはいるのだろうが軽薄であり。

そしてなにより人の心がわからない。

だからオレが、こう思うことくらい許してほしい。

「浮かれた五条悟は」

「死ねっっっ！」

君はイカれたボーイ／ガール

「それじゃーまず自己紹介といこうか。僕は五条悟。君の従兄妹にあたる」

「はあ」

「君は自分の記憶も曖昧だと思うから、これは説明しておこうか。君の名前は五条^{いのり}祈だ。

君は三歳のときに母親を殺して、嚴重な封印措置にあつた」

「オレみたいな美少女がそんなことを……」

「はっはー、君結構いい性格してるね？ まあいいさ。物心ついたときから自分しかいない場所。そうなるのもわかる」

いや別にそんなことは思っていないんだけど。ていうか関係ないんだけど。

と、「祈って呼ぶね？」なんて聞いてくる悟に頷いて返す。

オレは自分の見た目がかわいいことを認識しているが、それだけだ。内面に関しては一切なんとも思っていない。別段特別な感情なんて当然ないし、そういうのが当然だろう。

「つまり、年月にして十年。君が捕まっていたのはそんな長い期間だよ」

「十年……そんなに？」

「といつても、君の自我は希薄だったし。記憶もほとんど薄れているだろう。」

だから体感としては一年程度だったんじゃないかな？」

「んー」

オレ自身の体感としては、一日も経ってない。

しかしそういう事情があつたのならオレの意識がこれまで出てこなかったのも納得だ。

一体なかなかどうしてそういったことになったのか。首を傾げて問いかけると、五条悟は説明を続ける。

「五条家っていうのは、呪術界御三家と言われるほどの呪術の名門だ。

故に家系相伝の術式っていうものがある。」

けれど祈の場合はなかなか特殊な術式の現れ方をしてね」

「特殊？」

と言ったら、すぐに思い浮かぶのは「眼」だ。

オレは睨むことで、悟いわく「きよしき・むらさき」なるものを発
生させることができる。

しかしそれは本来異^{イレギュラー}端な現れ方。

天才だから、これだけの状況証拠があればすんなり理^{わか}解^かつてしま
う。ふふ、自分の才能が恐ろしい。

……とはいえ、これのせいで母親を殺してしまった。少しだけ、思
うところもある。

「祈の場合は」

目の前に指が突き出される。

「右目に順転の術式：「蒼」が。左目に反転の術式：「赫」が。

六眼は持っていないようだけど、『焦点を当てた部分に術式が発動す
る』——そんな、イカれた能力がある」

「……今、オレが睨んでたらどうなつてたと思います？」

「敬語とかいらぬよ別に。あと、その問の解答としては僕ごと「☒」
で吹き飛んだだろうね。」

「☒」は反転と順転を衝突させて、それを押し出す——いわば「無」
を飛ばすわけだ。重なったところをこいつが削ぎ落としていくから、
どんなに硬かろうがどんなに強かろうが関係ない。

本来はこれを使うのは限りなく難しい。けど、祈の場合は見た場所
に反転と順転を同時に発動させるから、「☒」を無理なく発動させるこ
とができる。

つまり無差別破壊兵器つてことだ」

代わりに、と続き。

「祈は眼にしか術式がない。つまり無下限呪術のニュートラルな力は
君には使えない。」

だから、君を捕らえて封印するのは簡単だ。

それでも僕は君を引き取ることを選んだ。なんでだと思っ？」
二秒考えた。

「オレが……可愛かったから……？」

「……………」

黙られても困る。

いや、黙ったということは認めたと同義ではないだろうか。

つまり五条悟はオレをカワイイと思っっている。

正解に違いない。

ふふん。

「……さて。当面僕が君の面倒を見るわけだが」

「はい」

「とりあえず、服とか用意しないとイケないね」

「そうだねえ」

買いに行くことになった。

アルティメットスーパ―美少女たるオレと並んで歩くとは羨ましいやつめと思うが、しかし悟も相当なイケメン。

五条家は美形のバーゲン・セールかよ。

それでもオレが一番かわいいけど。

——しかしながらオレはというところの体初心者。ついでに女の子初心者。

着替えを買いにきたということはつまり、アレである。

どっさりと試着室に持ってきた服を床に置きながら、オレは颯爽と上に着ていた服を脱いだ。

「ふっ」

ブラしてねえ。

十三歳って普通付ける年じゃないの？　と思っただが、オレが最初着ていた服はそれはもう悲惨なものであったため仕方ないのだろう。

そんなの付けてる場合じゃないということだ。

「っ——」

ここは悟がないときに調べるとして、今はとりあえず服の噛み合わせを選ぶべきだ。

か。ということはあるべく厚着がいいだろう。重ね着スタイルで行く

「……むむ」

ここで、迷う。

個人的な感情としてはズボンを履きたい。

けれどIQ200のこの頭的にはスカートのほうが間違いなく合うだろう。

どうするべきか。

とりあえず下に着ていた服も脱ぐ。

「ふっ」

ノーパンじゃねえか。

以下省略。

完璧に全裸になってしまったため、普通にズボンは履けない。

オレはスカートを履くことになったのだった。

「よおーし」

「あ、着替えた？」

と、真後ろからそんな声。と同時に、鏡越しににゅつと出てきた五条悟の顔。

そしてオレは未だになにも着ていない。下着すらつけてなかった
ので完全に全裸である。

「……ゴメンネー」

いや、仕方ない。

今のは勘違いしてもおかしくないよね。
なわけあるか。

試着室に持ってきたものを全部手に持ち、最初の服に戻す。

その姿のまま外に出る。

「おっ、どした？」

「全部買って？」

「了解、全部ね」

最初からこうしとけばよかつたんじゃないかなあ……。



「――で、結局なんだったの?」

「んー?」

「オレを引き取った理由」

「……………」

思い出すのは、親友との決別。

道を違えた二人。自分の過ち。生き方を決めることにした一件。

「過ちってというのはさ。『過ぎてから』って書くんだよ」

「…………? そうだけど」

「ははっ」

彼女が彼女を引き取った理由なんて、全て私的な理由だ。

無下限呪術は六眼とセットで運用することによりその真価を發揮する。

けれど、それは希少がすぎる。

五条悟以前に現れたのは数百年前の話。

だからこそ。

「無下限呪術の扱いなら、現代にこの僕以上の人間はいない。

だからだよ」

「なるほど…………ってことは、この眼の暴走も、制御できるようになるのかな?」

彼女は五条が引き取ってから、あまり感情を見せていない。

それが術式の暴走を防ぐためだということは明白だ。

彼に裸を見られても、決して睨むことなく無表情で切り抜けた彼女。

発言から、感情表現が豊かな子だということはわかっている。

けれど、そんな彼女が感情を殺さざるをえない現状。

五条悟は、それが嫌だった。

それに加え。

虚式「☒」が扱える術士というのは、本当に貴重だ。

あれを睨んだだけで放てるということは、術士として相当な才を

持っているということとは間違いない。

「止める」力がなく、その上「蒼」や「赫」の精密な制御ができないのは残念だが、それを補ってあまりあるその力——だからこそ。「できるさ。必ず」

五条悟は、彼女に願いを託すのだ。

五条悟にスカイラブハリケーンを夏油傑と一緒にやろうとした過去があつてほしい

「ああ?」

言われたことがよくわからなかった。

オレの怪訝な声が、流していた音楽をかき消して凜と響く。

「いや、ね」

「うん」

五条悟は言いよんどんでいる。しかしそうだろう。オレも耳を疑っている。

先程の言葉が嘘ではないのなら、向こうだって気まづいはずなのだから。

「えー、五条家のほうから、君と僕で『結婚』することにのお達しがきましたー」

「おつ、オマエさあー!?!」

きつとこの反応は間違つてないはずだ。

「かわいいオレだからといって、それはさすがに違うだろ!?

結婚するならもつといけめ……いけ……顔に関してはまあ、いいとして。

もつとマシな性格なやつとかいるだろ!?!」

「君、人のこと言えないくらいにはアレな性格してるよね」

「くっそお……どうしてこんなことに……」

項垂れる。

向こうはというと、普段通りのお気楽顔だ。オレと結婚するなんてことに対して、特段思うことはないらしい。

この次元一の美少女になった以上、そういう話ができることは想定していた。

だからとりあえず、釣り合う相手の条件については一応考えてはいたのだ。

五条悟は筆頭候補といってもいい。

全創作物世界一の美少女であるオレの相手にとって不足のない顔、立場、実力、あと金。

だが。
けれど。

それにしたって、こいつは性格が終わりすぎているだろう。

なまじ最強なぶん人の心がわからないし。

最強で通用してしまうぶんわがままを通すし。

力があるぶん配慮が浅い部分とかあるし。

この間の試着室の一件はまだ許していない。

今度また「☒」でお仕置きしてやろうと思っている。

「結婚の話は前からあったんだけどね。今回、封印処置にあった祈が自我を取り戻してしまった。

これは五条家にとっては爆弾なわけだ。

だから、対処することのできる僕の妻って立場に封じておこうって考えなんだろう」

「これ、そんなに怖い？」

「さあ？ でも、さすがの僕でも「☒」は止められるかわからないからね。連中の怯える気持ちについては、納得はできる」

オレの眼を指しての言葉に、悟はそう言った。

感情の読みづらい顔だった。

こういう無表情に、彼は時々なる。その場合、普段の軽薄さはすっかりと鳴りを潜めるのだった。

美形が無表情だと正直怖い。

この世界に転生する前からよく言われることだったが、転生後に身に沁みて感じる。

「しっかし、またスゴイ話だなあそれ……。自分の意思は置いといて、最強キャラの伴侶ってことだろ。オレもちよつと、そういう素振りとかしたほうがいいかな？」

「すれば？ あ、あれやってよ。すっごいケバい感じにして『皆様、ご

めんあそばせ!!』みたいなイヤミーな感じの婦人」

「せんわ」

こいつの前で体面繕っても意味ねえなと思ったのでしないことにした。

オレは悪くない。

きつと、こいつの知り合いならみんな「それがいい」と言うはずだ。

「そういえば」

今度はオレから切り出した。

向こうは「ん？」と疑問に首を傾げる。

「ドイツとスカートが見当たらなくなってるんだけどさー。知らない？」

これはこの間からだ。

今朝も軽く探したけどなかったの、今日こそ聞かねばならない。せつかく買ってくれたものなんだし、気づかずになくしてたなんてことになるのは嫌だ。

だったら探してることをこうして伝えておいたほうが、きつと向こうも協力してくれる。

ダメだったときもあんまり怒られない。ふふん。

「ちゃんと探したの？ モノに足が生えて逃げていくってことはないでしょ？」

洗濯とか、そこらへん全部祈がやってるじゃん」

「つつても、把握しきれないことってあるよね」

「ていうか祈のものは「自分で管理するー！」って言ってたじゃん。僕に聞くなよ」

「とはいえさー。オレがわからないんなら、悟に聞くしかないじゃん？」

つまりこれは当然の帰結ってやつなわけよ」

「なんというか……それが本気で天才の発想！ みたいな感じのドヤ顔されるといじめたくなってくるね。ほらほら」

「にやつっ!」

ほっぺたを突かれる。

「ぬぬぬぬ……この世紀末美少女伝^{いのり}祈ちゃんのド高貴でドかわいいドぶにぶになほっぺを気安く触るなど……」

「猫みたいな声だけど、今どき狙いすぎはウケないよ？ あざといのは程々にね」

「のじゃ語尾みたいにいっそ狙いまくったほうがいいかな？ ふふふ、ド高貴な妾と婚姻ができて嬉しいじゃろ？ もっと褒めて称えるがいい！ あつやべえさつきやらないって言ったのに！」

「……マジでやめてくれ」

苦笑いされた。

まさかこんな反応をされるとは思っていなかったので、少しシヨツクである。

そんなにダメかなあ、のじゃ語尾。

創生神話よりもはるかに価値のある美少女であるオレののじゃ語尾とか、世界でも有数だと思っただけ。

「見てると、知り合いを思い出すからな」

「むー……？ それ、どんな人だったわけ？」

「珍しくもなんともないただのガキ」

あんまり突っ込んだ話はしないほうがいいか。

感情の読みづらいその表情は、今日一日でよく見ている。

「もうとつくの昔に別れたけどね」

「やっぱり恋人……」

「友人だよ。強いていうなら、だけど」

本気で呆れたような顔をされたので、言葉どおりそういうことなのだろう。

恋人だったら面白かったのになあ、と思いつつ、時計を見たら既に風呂などを用意するべきだろう時刻。

五条悟の家……というより部屋。

万が一の暴走に備え、オレは彼とここで同棲することになったのだった。羨ましい。

この部屋の家事は、オレが担当することになっている。

炊事や洗濯、掃除、風呂当番など全般。

これまでやってこなかったこともあり、いまいち不慣れであるが、それでも家事をする自分のかわいさを思えば覚えるのは早かった。

ちなみに作った料理は外食が多いっぽい悟にすっごい褒められた。これが女子力というものである。ふふん。

ということ、今はもうルーチンワーク。

慣れっことになった自分の仕事をこれからすることに。

買い出しなどの関係上、まずは夕食を考えなければ。

自分だけだとあんまり意見が出てこないの、今日は家にいる悟に意見をもらうことにする。

彼はあんまり悩まずに意見を出した。

「寄せ鍋作ってー」

「……わかったー。一緒に家で食べるの、三日ぶりだしね」

肌寒い時期なのは間違いないし。

冷蔵庫の中身はおおよそ把握している。

こうなると買い出しに出る必要があるな、と思い、外へ出る準備に着替えを。

今の服装は外に出ることを意識していないもののため、この顔を若干翳らせてしまう。

もつといい服装があるのだ。

「……ん？」

無造作に引き出しに仕舞われていたのは、なくなっていたと思ったタイツとスカート。

自分の確認不足だったのだろうか。

とにかく見つかってよかった。

ひよつとしたら悟が見つ付けてくれていたのかもしれない。

……いやまて。

軽く匂いを確認する。

オレは自分とその持ち物の匂いをだいたい覚えてるから、すぐに自分以外の匂いが混ざっていることに気づいた。

振り向けば、彼はオレから視線を逸らす。

その反応でだいたい何をやったかわかったが、オレはそれでも彼に問いかけるのだった。

「あのさー、どういふこと？」

「いや、えーつとねー……ちよつと、この間パーティーをしてさあ。生徒と一緒に遊ぶのに借りちやつた☆」

「……………」

目を瞑る。

このままだと、また「☒」が起こってしまうから。

大きく深呼吸。

をしたんだけど、やっぱり怒りは収まらない。

「——浮かれてんじゃねーよ死ねっっ!!」

蹴った。

「うわー」なんてふぎけた声で倒れるこの男は、やっぱりどこかで死ぬといい。

日常を重んじていこうねという梨

「ていうかさー祈。グラスンつけたりしてみない？」

いきなりの悟の問いに、返すものを一瞬模索する。

しかし考えても現れてくれなかつたので、「んー」だとか言ってみて、その真意を探ることにした。

「サングラス？　なんでまた、いきなり……」

「眼を隠すためだよ。ちよつとでも隠しといたら、」「出ないんじゃない？」

「おそらく、そう……だと思う」
だけど。

だからと言って、その提案を受け入れたくない思いがある。

最強ド高貴少女にそんなもの、似合わないのだ。

メガネならいいと思う。

「いいから、とりあえずやってみなつて」

「あつちよつ」

悟に無理やり付けさせられた。

鏡で with グラスンの顔を見る。

「違う……こんなの、ド高貴なオレじゃない……違うんだ……」

かわいい。

かわいいが、違うのだ。

いやでも待つてちよつとアリかもしれない。

ド高貴じゃないけど、いいかもしれぬ。いやまていいぞこれ。ちよつと後ろに悟がいるため、ヤンキー兄に付き添って大人のようにしてるみたいでいいぞこれ。

「五千兆点……！」

「最初どんだけ高いのそれ」

そりやもう言語で語れないくらい。

「でも、これで外歩くの照れるなー。これじゃきつと芸能界にスカウトされちゃうよ」

「祈つて自意識高すぎるよね」

「つてことで眼帯にしない？ それならきつと憂いのある感じでド高貴感増すから」

「まずド高貴って何？ ていうか眼帯だどどっちか出るかもしれないじゃん。危険じゃない？」

「だからオレ、右目隠すね」

「待って待って「赫」危険だから逆にしようか」

「え、でも吸い込むよりよくない……？」

「……そうかもね」

というこで、右目に眼帯を付けることにした。

現在買い物中。悟も付き添いに連れ出して。

女子って買い物が長いし多いらしいので。

最強をこんなにも連れ回していいのかとも思うが、彼自身が言い出したことなので問題ない。

そういうことにしておいた。

それに緊急の案件が出てきたとき、すぐに悟が向かうという約束をしているのだ。

だからそちらについて、あれこれ気を回さずにいる。

オレの案件じゃないので悟に丸投げだ。

「夕食って、何がいいかな？」

「祈のセンスに任せる。強いていうなら肉がいい」

「デザート買って帰る？」

「当然」

即答だった。

なんだかんだしつかり何がいいのかの提案をしてくれるので、ごく助かる。

前世のオレなら、きつとこうして答えることもなかっただろう。

性格が終わっているくせして、こういうところにイケメンのオーラを感じさせてくる。

性格面で超妥協することになるが認めよう。五条悟という男を。

オマエならこの祈ちゃんとは結婚するに値すると。

なんて言ってみるけれどコイツとの結婚を断ったときまた監禁さ

れるので選択肢がない。

五条悟と結婚。

これがもう確定されていた。

泣きたい。

「——痛っ!?! 眼帯超いたっ!?!」

「なんかイラツとした」

「まだ何も言っていないよ!?!」

「まだって、つまりなにか言おうとしてたってことだよね?」

「あつちげえ今のなし! 訂正! 取り消し! 消印有効!」

「最後のなんかおかしいね」

そうだろうか。消印有効、何がおかしいのだろう。

疑問を解消するため、ジャングルの奥地に向かったオレ。そこで行われていた……

「何ていうか、祈ってすごく感情豊かだよね」

「えっ、そう? 照れる」

「今どこに照れる要素があつた?」

脱線。

「いっつもさあ。怒ったりしたときに感情を殺してるじゃん」

「そうだね」

「辛くないの? それ」

「んー……」

辛いかな辛くないかで言ったら、辛くない。

そもそもオレ、意識してやってるわけじゃないし。

けれど悟から見るとそう見えるわけだ。

感情ってわからない。

人間って難しい。

「辛くないよ。無意識でやってることだし」

「そうかあ? 結構気を使うことだと思うけどね」

「そうなんだ。少なくとも、オレにとって」

「なるなる。じゃああんまり気にしないことにするよ」

しかし肉系か。

一体どういうものを望んでいるのだろう。

悟の好みを知らない。それを知っているくらい長い付き合いじゃない。

だから、少し悩む。

オレの趣味に付き合ってもらおうか。

そう思っつて、適当にタレをカゴに入れた。

「おっ、今日生姜焼き？」

「こういう簡単なヤツしかまだ作れないんだ……許して？」

「いいよいいよ。誰かと会食するのが楽しいでしょ。それにだいたいなんでも美味しくいけるし」

「え、意外。たっかいとこ行きまくってるかと思っつた」

「行くけど、学生時代とか自前で用意してたからね。さすがにそのときからずーつとそういうところに行くわけでもないだろう？」

自炊もできるんだ。

もつと意外。

となると、意外と料理得意だったりするのだろうか。

オレよりもうまい可能性が出てきた。

もしそうだったら教えてもらおう。

なんでもわかるやつに聞く。それがオレのやり方なのだ。

そのまま、流れでいるものを買っつていく。

「おやつ買おっつか？」

「わーい!!」

二十歳児が両手を上げて喜んでる。

なんだこいつ。

「何がいい？」

「冷静に考えたら元々こつちのお金だよな」

まあそうなんだけどさ。

それを言っつちやおしまいだと思う。なので聞かなかつたことになつた。

カゴに投げ込まれるあれやこれや。

オレの超かわいく華奢で弱々しい手じゃ持てないくらいお菓子が

どっさり投入される。

「んぎーんぎぎー」

「あー、もう。持ってやるから」

「買いすぎだと思うよ！」

——数日後。

こつそりとソロでの買い物にチャレンジしたときのこと。

「あら、祈ちゃん」

「あ、店員さん。今日も来ちゃいました」

ウルトラ最強レジエンド女兒のオレを目にかけてくれる店員さんと、空いているレジで会話。

「今日、お兄さんいないの？」

「あ、悟あれでも忙しいんで。

今日ちよつといなくて！」

「そつか。荷物持てる？」

「少なめにしました！」

ちよつと食後のスイーツを買いにきただけなので。

購入。

買いすぎたのかそこそこ重たいそれを手に提げて、帰る間際。

「あのね、祈ちゃん。一応言っとくと」

「？」

一体なんだろう。

オレが疑問に頭を傾げると。

「お兄さんのことが大好きでも、外であんまり出したらだめだよ？お兄さんにそういう視線が行っちゃうから」

「……えっ」

盛大に衝撃。

いや、オレ悟のこと好きじゃないし。

許してないこともたくさんだし。

なんだかんだ結婚することになったけど、それでも好きじゃないんだけど？

ていうかそうじゃなくて。

「祈ちゃん、すごくかわいいから。だから、こう……お兄さんに、ロリコン疑惑が……ね？」

「兄妹説……どこ……？」

「あんまり兄妹に見えないんだよね。……祈ちゃんが家計握ってるどころとか。なんか、やりとりが」

「……………」

五条悟について、悪い面をよく知っているから素直にこう思ったことなどなかったが。

うん。

今回に限って心底同情する。

反転術式三銃士

「反転術式三銃士を連れてきたよ！」

「反転術式三銃士？」

いきなり突拍子のないことを言い出すのには慣れているが、それにしては随分と突然だ。

ていうかそもそも反転術式ってなんだ。

まだ教えてもらってないんだけど、ひよつとして当然のように応用のアレやらされるのだろうか。

オレは天才だから反転術式がどういうものなのか大体推測できる。

たぶん「赫」を使うのに必要なものだ。

だって前に術式反転って言ってたし。ふふん。

オレの完璧すぎる推測はさておきとして、悟は自分を指差した。

「まずはこの僕、五条悟！ 最強だから使えるに決まってるよね！ちなみに今も使ってるよ！」

「はあ」

次に、隣にいる女性を指差して。

「そして家入硝子！ 現在高専で医師として活動中！ 僕の同級生！」

「はじめまして」

「はあ」

「以上だ！」

二人じゃねえか。

オレの疑問を見透かしたように、悟はこちらを指して言う。

「三人目に祈がなるんだよ。大丈夫、呪力操作は上手だしきつとできるようになるって！ いつになるかわかんないけど！」

「はあ~~~~？」

「この馬鹿が無茶苦茶なこと言ってるだけだから、別にできなくてもいいよ。他人の治癒ができるくらいになってくれたら、私としては助かるけど」

「あ、はい。がんばります」

「ちよつと待った祈なんか僕と硝子との対応違くね?」

「はあ」

「はあくくく? こっちは一応君の命助けてるんだよ? もっと敬つたりしない? ねーねー祈ねー」

そういうところだと思う。

「そもそも、反転術式ってどうやるの?」

「ほら、アレだよ。ひゅーいとやってひよいつて感じで」

「ひゅーいとやってひよいだね」

「はい解散」

わかんねえよ。理論で説明しろ。

こっちはそんな感覚派じゃないんだよ。天才だけど。ベクトルが違うんだって。

そんなふうなこと言われても困るだけだから。

「ていうかさー、そもそも反転術式ってなに?」

家入さんが悟の頭を叩いた。

ちゃんと叩けているあたり、たぶん自分でも自覚があるのだろう。

悟は家ですら無下限呪術を稼働させている。なので、普通は触れることもかなわない。

つまりこれは自分でも悪いと思っっているということだ。

ばかやろー。

「そっかそっか! そこから説明しないとだね。

そもそも呪力っていうのは負のエネルギーなんだ」

「ふむふむ」

「前に術式を家電に喩えたよね? 今度はそれを人の体としよう。

人の体は正のエネルギーでできている。だから、負のエネルギーである呪力では強化はできても再生することはできない。

怪我を埋めることはできない」

「あつ、わかった! つまり正のエネルギーを作るのが反転術式なんだ!」

「ご明察! イエーイ!」

「イエーイ!」

ハイタッチ。ふふん。やはりオレは天才である。

そして同時に、術式反転のメカニズムもわかった。

正反対のエネルギーで行使するのだから、その効果もまた裏返るといふものだ。

無下限呪術ならば、負のエネルギーで発動するものが「蒼」。これはモノを引き寄せる力。

正のエネルギーで発動するものが「赫」だ。これがモノを弾く力。虚式「 \boxtimes 」に関してはこのどちらをも衝突させ発生する「仮想の質量」を放出する技である。

なんというか、ゲームのバグ技でありそうな。

「無表情なのに明るいのだな」

「びつくりするくらいね。見てよあの顔。絶対馬鹿なこと考えてる」

だってこんな美少女が明るくないとかダメじゃん。

世界の損失ですよ。

「ていうか、反転術式って別に術式じゃなくない？ ややこしいよ」

「生得術式のことを一般には術式って言うからねえ。確かにややこしいと言えばややこしい。」

でも、それを言ったら領域だってそうなるんじゃない？」

「そもそも領域ってなに？」

家入さん、二発目。

ぺしんという音が鳴った。

「そうか、基礎の呪力操作しか知らないのか。うっかりうっかり。生徒と混同してたよ」

「しつかりしろよ五条……あんた一応この子の夫になるんだろ？」

「それがさー」

と、ここで悟は口を尖らせて。

「最近、祈と遊びにいったときにロリコン扱いされるんだよね。どうにかならない？」

「事実ロリコンだろ」

「違いますうー、全然、全然、ずえーんぜん違いますうー」

「でも匿うだけなら結婚する必要はなかったんじゃない？」

「えっ、そうなの?」

おい二十歳一般最強術士。

なんだかんだこれまで我儘を通しまくってたらしいのになんでここでそんな鈍感さを出すのか。これがわからない。

脱線。

話を反転術式に戻す。

「要は、負のエネルギー同士を掛けて正のエネルギーにするってわけ」
「なるほど……なるほど?」

軽く呪力を動かしてみる。

呪力同士を掛け合わせるって言ったって、よくわからない。

咸卦法か何か?

「わからん!」

「どう伝えればいいかな……」

「え? 祈できないの? マジで? ほらこれだよこれほらほら、え?
? わかんない? センスねえ」

左目を隠しつつ睨んだ。

それにより発動された術式順転「蒼」が悟を引き寄せる。

そのまま目線の動きで部屋の外へと運んでいくと、悟は扉を弾き飛ばしながら吹き飛んでいった。

あ、あいつ何気に無下限ガード全開にしてやがる大人げねえ。

「……ヨシー!」

「よしよし、よくやった」

「ひっでえ。僕じゃなかったら大怪我だぞ? 全く」

続けて五条悟は言う。

「でも目線での制御はできるようになったっぽいね。まさか僕で試されるとは思わなかったけど。……ったく、扉直さなきゃいけないじゃねーか」

「……ん? そう言えばちよつと待て五条。そこで立ってろ」

「はあ?」

家入さんの言葉通り、悟は入り口で立ち止まる。

彼女に手を動かされ、オレは今度は右目を隠した。

「このまま「赫」を撃って」

「はい」

「ちよっ、バカ」

言い終わるのを待たずに、放たれる「赫」。

それが悟を更に吹き飛ばす。

「……何がしたかったんだオマエ」

「ご苦労さま。おかげで興味深いことがわかったよ」

「はあ？」

彼女は指を二本立てて、説明を始めた。

「呪力は最小の状態でも2以上なのはわかるよな？ 五条が昔言っ

た天与呪縛の特例を除いて、だけど」

「あー。そうだな」

なにそれ知らん。

「反転術式は負のエネルギー同士をかけ合わせて放つものだろう？

これに関しては過不足なく正のエネルギーにするために、出力は二乗になるはずだ」

「あーね。でもさっきのは全く同じ威力、だからおかしいってことだろう？」

「そう。目に術式が宿ることはままあるけれど、片方ずつで効果が反転しているというのはおかしいし」

「そもそもの性質が反転してるんだよ。僕が言うんだから、間違いない」

「でも、そうになると術式を二つ持っていることになってしまう。合ってるだろう？」

「それはまあ、そうだけだな」

「つまり出力の過程で、術式が反転するに足る理由があるはずってことじゃない？」

天才だけ何言ってるのかわからん。

とりあえず、オレの目がおかしいということはわかったが。

わからないのでとりあえず首を傾げておいた。

と、こちらを見て黙り込む二人。

何か言ってほしい。困る。

「あー。簡単にまとめると、だ」

「はい」

「ひよつとすると、左目自体が負のエネルギーでできている可能性がある
あると、私は疑ってる」

「はあ？ なにそれ、呪力で出来てるってことか？ んなわけねえだ
ろ」

「出力が変化しないのは、左目が呪力で出来てるから？」

「かもね。いや、ただの推論だ。間違ってる可能性のほうが高いだろ
うから、あまり気にしないでくれ」

でも、呪力で体が構成されてるのって呪霊じゃなかったっけ。

IQ200を誇るオレはきっちりその教えを覚えている。えっへ
ん。

五条家は御三家。呪術の名門だ。

そんな場所が、呪霊の交じるものを生み出すことはないと思うけ
ど。

「でも、スーパーの人はオレの目見えていますよ？」

「……わからんな。うーん、違うかも。変なことを言ったな」

「そもそも本当に呪力で出来てるなら、僕の眼で気づけないわけない
だろ？」

「それはわかってる。ただ、もしそうなら、目を経由することで反転術
式はできるんじゃないかって思ったただだよ」

「目を経由、ねえ……」

言われた通りに呪力を左目に。

そこから、その呪力を右目に寄せる。

左目を瞑ってから、「蒼」を発動。

「——おおっ」

と、悟がまた吹き飛んだ。

壁をぶち抜いて、遠くへと飛んでいく。

「……驚いた。まさか本当にできるとはね。ほとんど冗談の域だった
んだが」

「……嘘だろう？ ちょっと見せて」

オマエのほうがよくぼど嘘だろうだよ。

戻ってきた悟は、顔をぐいっと近づけて左目を覗き込む。

いや鼻がほっぺにくっついてるが。近いが。

「は？ いやいや、普通の目だぞ？ どういうことだ？」

「まあ、まだ呪力に関しては解明されてないことも多いから、ちやうど彼女がそれなんだろう。

私のほうでもなんとかして調べていくから……そろそろ退いたほうがいいんじゃない？」

「は？ なんで」

近いからだよ。

オレの目線での訴えで、合点のいったような顔をして悟は立ち上がろうとする。

ちなみに体を離さずに立ち上がろうとしたので、オレの頬に彼の唇が触れたりなどした。

「んー、やっぱりよくわかんねえや。ってあれ？ 硝子どこ行った？」

「……………」

今のは不幸な事故なので、別に怒ったりはしない。

けど、それでも軽く吹っ飛ばすくらいは許してほしい。最強の称号に免じて。

あれ……この五条悟、浮かれてないぞ……？ 浮かれた五条悟とは一体……うぐぐぐ……

「――誕生日？」

いや、知らんし。オレが知つてるとお思いか。

そういう意図を込めてヤツを睨むが、まったくわかっていないよう。普段の勘の良さは完全に消えているらしい。

まあ、普段の生活で頭つて使いたくないよね。

オレは天才だからやるけど。

「ちなみに僕の誕生日は12月7日！ 盛大に祝ってくれていいよ！」

「ふーん。あ、家のほうに聞いたらわかるんじゃない？ オレ、自分の誕生日覚えてないし」

「反応薄っ、そういうのはせめてカルピスだけに留めてくれ」

「いや……だつて濃ゆいし……」

「祈のは味しないんだよ」

「そう？」

そうだろうか。これがわからない。

「あと、家のほうに君の記録は一切残つてないね」

「ほえー」

そうなんだ。

つてことは、オレの誕生日は完全に闇の中。

まあ、別にいいけど。

そもそも毎日誕生日気分になれるし。ふふん。

これも財布を握るものの特権である。

「祈はほしいものをあんまり言つてこないけど、気軽に要求してもらつて大丈夫だよ？ 金あるし。」

ゲーム機とかどう？ ポケモンやろうぜポケモン。なんか対戦販わつてるらしいじゃん」

「あー」

そういえば、この時代ってBWの時代か。
アナログテレビの終了もまだしてないし。

オレには2018年までの記憶がある。

未来を知っている、と言えれば聞こえは良いが、実際はそれにも穴がある。

実のところ、前世で起こった事件やらの記憶はもう完全に曖昧だ。
それに首相の名前すらも。政策名だって、完全に覚えていない。

一般常識に近いこれらを覚えていないのは相当な欠落だ。穴は大きい。

けれどポケモンくらいならオレも覚えている。

「いいね」

まあオレ最強だから。

初心者に過ぎない五条悟になんか絶対負けなしいし。

「じゃ、買いに行こっか」

「は？」

今は月曜日、夜七時。

うら若き少女を連れ回すにはすこし遅い時間じゃないだろうか
……？

オレがおかしいのだろうか。

でもこんな美少女を連れ出して、万が一何かあったらどうするんだ。

いや、こいつが最強だっていうのは知ってる。知ってるけど、知ってるからこそ思う。

何かあったときに相手のほうが危ない、と。

そういうことである。

「もー、なんでそんないきなり……」

まあ晩ごはん楽できるからこっちとしては嬉しい提案だったけど。
フードコートでのんびりとハンバーガーをつまみながら、悟の隣に置いてある今日の戦果を鼻歌まじりに眺める。

「大収穫！」

買ってもらったDSi。

悟はLLを。オレは手の小ささに普通のものを。

この神話級美少女はおての愛らしさも世界級だった。ふふん。なので大きいと手に合わなかったわけだ。かなしい。

今はちまちまチーズバーガーをつまんでいる。

「晩飯それだけでいいの？ 少なくて？」

「オレみたいな美少女にはこれくらいがちょうどいいのです」

「ふーん」

ファストフードっていいよね。

わかりやすくジャンキーな味。

鼻歌を歌いそうなくらいに上機嫌なオレを見て、悟が「でもさ」と言い出した。

一体なんだろう。

首を傾げる。

「ちゃんと食わないと肌荒れるよ」

「はーデリカシーねーな死ねー」

「無表情でしれっと毒吐いたね」

こんな美少女に向かってなんといい言い草か。

こっちは悟がない間大量の美容本読み漁って勉強してんだぞこのやろー。

ちゃんとそこらへんしっかりしてるから今日くらいはいいじゃん。

そうじゃん。

このやろこのやろ。

そんなのだから性格が終わってるとか言われるんだぞ。

「いや、でも僕の言ってること間違ってるってなくない？」

「オレ、正論嫌いなんだよね」

「なるほど」

家入さんに悟の学生時代のことをちよこつと聞いた。

友人にこう返してギスったことあるらしいじゃん。

流石にそれを言われたらなんとも言えないのか。彼は言葉が続け

ることはなかった。

きつと、これ以上は不毛だと思ったのもあるだろう。わかってることを指摘されるのはいらつとするとはいえ、さすがにこちらも大人気なかつただろうか。

少し申し訳ない気分になりつつ、沈黙が嫌だったので「ごめん」と謝っておく。

「なんで？」

「なんで、ってほら。ちょっと嫌な言い方したし」

「うへー。そう言われると昔の僕が超嫌なヤツみたいじゃん」

「いや、まあ、それは違うなと思う」

「言うねえ」

炭酸が飲めないから、オレンジジュースで。

ハンバーガーをちまちまと食べ進めつつ、飲み物で口の中をさっぱりさせる。

「……………」

「……………」

食べている間、やけに悟がこちらを見てくるので、そう聞いた。

「いや、なんでもないよ」

絶対なにかあるだろ。

そう思ったけど、オレは何も言わない。

彼の目は、なぜか真剣なものだったから。

◇

「よーしとうちやーく！」

「なるべく早く済ませてきてねー」

ひらひらと手を振って、振り返る。

「あれ？ こないの？ 好きなもの買ってあげるよ？」

「お前は僕の母親か。このスーパ―、祈といると僕がロリコン扱いされるんだよ。だから」

「あー。そうね。ごめん！ じゃあ頑張って早く終わらせる！」

「はいはい。おねがいね」

彼女がスーパーの中に消えた後、彼は闇夜に歩き出した。

「よお、五条悟。子守りか？」

現れたのは一人の男だ。

呪力を纏うさまを見ればすぐにわかる。術士であると。

彼が五条悟の前に姿を現した理由なんて明白だ。

最強の証明がほしい。

あるいは、彼にかかった莫大な賞金がほしい。

そういつた呪詛師が、高専時代から変わらず彼を狙っている。

「まあね。で？ やる気？」

返しながら、相手の実力をすぐに悟った。

弱い。そもそも、「最強」になってから数年だ。そんな今になってもなお狙ってくる連中が、勘違いした雑魚でないわけがないのだが。

仕方のないことだ。

これまでもやってきた。

そしてこれからもやっていく。

これはどこまでも当たり前前の、「いつも」を彩るパーツでしかない。

「おうとも。いやあ、しかし、まっさか、五条悟がロリコンだったとはな……そういうタイプじゃないと思ってたが。意外も意外よ」

「……祈の側だし、特別に殺さないであげようと思っただけ。やっぱり殺そうかな」

開戦。

とはいえ、語るまでもなくその顛末は知れている。

完成した無下限呪術の遣い手を正面から倒せる存在なんて、この時代にいるわけがないのだ。

「——ごめん！ 遅くなった！」

今回は、感情が表情によく出ていたと思う。

そう思うのは、自分が彼女に慣れてきたからか。

戻ってきた祈の頭を撫でながら、五条悟はずっしりと詰まった買い物袋を引き取った。

「今日はいっぱい歩いたなあ」

その言葉には笑みで返す。

わざわざ歩いて外に出る理由は、実のところ特にない。

車も用意させようと思えば用意させられる。

なのになぜそうしないのかと言うと。

『——お前……あのガキが、自分の地雷だって……喧伝するために、わざわざ……』

そんなわけないだろう、と思う。

そんなわけないはずだ、と思う。

けれど。

かつて、わずかながら同じ時間を過ごした仲間のために怒ることはできなかった。

ひよっとすると、彼は証明がほしいのかもしれない。

自分の伴侶に何かあったとき、そのために怒ることができるという証明が。

五条悟が、冷酷に染まりきっているわけではないという証明が。

『殺したければ殺せ。それには意味がある』

そんなの、あのとときにできなかったことが証明しているというのに。

けれど、四年の月日では埋めきれなかった欠落がある。

二十歳になった。もう少しで二十一歳になる。

けれど最強の青年は、まだまだ大人にはなれなかった。

それこそ、まるで無限が隔てているかのように。

「——寒いね。今日は」

風が吹く。

息が白く染まるような時期だ。

幼い体には堪えるだろう。そう思って、傍らの少女を見た。

全くの無表情。

平時の彼女は、その奥の色を何も見せてくれない。

五条悟にとつて、五条祈という少女は親戚だ。

七の年の差。それはあまりにも大きい開き。ひよつとすると、無限にも思えるほどに。

彼女は十年の月日を監禁されたまま過ごした。

七年でそう思うのだ。果たしてそれは一体、どれだけの苦痛になるのだろうか？

たとえ、彼女に自我がないとしても。

関係性は呪いだ。

昔、従兄妹として産まれた少女を見に行つたことがある。

彼女はまるで太陽など知らぬかのように、白い肌と髪をしていた。

そして再び会つたときも同じく。

彼女は太陽など知らぬかのように、白い肌と髪をしていた。

——関係性は呪いだ。

五条悟は最強になった。

五条家どころか、呪術界に対してもその我を通せるほどに、彼は力を持つてしまった。

だから、いつものように彼女を助けることにした。

呪術師は万年人手不足だ。

毎年任務に挑み、死ぬ高专生がいる。

一般の呪術師だってそうだ。

毎年何人が死んでいるのだろうか？

五条悟は強い。

ともすると一人で日本という国家を転覆させられるほどに。けれど、彼一人が強いだけではダメなのだ。

高专時代。

親友との決別。その一件で、彼はよく知っている。

「月が綺麗だね」

五条悟らしからぬ考えを打ち切るために、他愛のない言葉を紡ぐ。

特段それに意味も、意図もない。

ただあるがままを表現しただけ。

「……………」

おや、しかし。

無表情だった彼女の頬に、一瞬朱が差したような？

今の言葉の何が琴線に触れたのかわからなかったが、そのような反応を見せた彼女に彼は疑問を抱く。

「……実際には言っていないらしいぞ」

「あ、ごめん全然そういうつもりじゃなかった」

「……っ、死ね！」

蹴るな。

「うー……」

「……まったく、世話が焼けるね」

「……っ!? や、やめろー！ この神が作りたもうた美少女ことオレに軽率に触れるんじゃないーい！」

そんなバカバカしいことを言う彼女を無視する。

勝手に人を蹴って、それで足を痛めたのだから完全に自業自得である。

けれど、彼女のそんな馬鹿らしさこそ、どこことなく心地いい。

五条悟は。

こうした彼女との日々こそが、彼を彼らしくしてくれているのだと、なんとなく。心の奥でそう思った。

「——だから！ ……このお姫様抱っこはやめろー！」

ナナミンとGTGってLINE交換してるし2011年以降も交流あったっぽいよねと思わなくもない

「イエイイハッピーバースデー！ フォー！ 僕！！ ついでに祈り！！」
「いえーい」

ぱちぱちぱちぱち。

本日は12月7日。

結局、オレの誕生日の記録は見つからなかったので、まとめて行うことにした。

何回も祝うよりこっちのほうが楽し。

ちなみに候補としてはオレと悟が出会った日を誕生日にするという話もあった。どっちでもいいと思ったが、悟はこちらを選んだのである。

理由はそのときはわからなかったが、今になると少しわかる気がする。

「いやー、祈も一緒にするといろんな人が来てくれるね。ラッキーラッキー」

「オマエそれが目当てとか言わないよね……？」

たぶん本音は違うと思うけど。

わざわざ場所を借りて開いた誕生日会には、たくさんの人が来てくれてる。

家入さん、見たことない金髪の男性、一回顔を合わせたことのある学長さん、見たことのない黒髪の女の人、高専の制服を着た人たち。

たぶん悟の関係者なんだろうけれど、口ぶりからするにこれまで祝いに来てくれたことのない人も多いらしい。

どんだけ人望ないんだこいつ。

「でも七海が来てくれるとは思わなかったな。術士やめるつもりなんですよ？」

「ええ、まあ。ですが結婚されるようですし。今年を逃すと祝うタイミングもないと思ったので」

「ん、それって僕の誕生日を祝いにきたわけじゃないってこと?」

「それはまあ。おめでとうございます」

「ほらほらもつと盛り上げてよ。ねーほら七海。ねー、もつとアゲてこうぜ七海イエー」

「えいつ」

「蒼」で引っ剥がした。

未だに制御がうまく利かない術式だけれど、ほとんど密着するようにして視界を対象で占領したら効果は一点に集中させることができる。

そんなことせずともちやんと発動させることはできるが、うっかり絡まれてる人を巻き込む可能性もあるので、ここは丁寧に行うことにした。

「あなたが祈さんですか」

「あ、はい。はじめまして。よろしくおねがいます」

「こちら、ささやかながらプレゼントです。お誕生日おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「おいちよつと待て七海。僕とのその対応の差はなんだ」

「ソンケーされてないんだよ気づけよ」

足を蹴る。今度は痛めないようにつま先で。

そりゃあ五条悟みたいに距離感が異常に近くてウザいやつより、オレみたいな清楚で常識のあつておしとやかな超絶美少女のほうが遥かに祝いたいに決まってるじゃないか。ふふん。

「考えてること丸わかりなんだけど? 僕とタメ張るくらいにろくでもないヤツじゃん君さあ。うわ、すげー伸びる」

「いひゃいひゃい」

引っ張るな痛い。

美少女のほっぺは繊細なんだぞ。それをお前、よくも。そう思っただけで睨みつけようとして、辛うじて静止。

こんなところで「」をぶっ放したらどうなるのか、知れている。当然ひとたまりもないだろう。

今日は眼帯をしていないのだから、特に危険だ。

「アンタ、女の子の扱いくらいもつとちゃんとしたら？ 嫌がつてるじゃん」

「あ、歌姫。今年と呼ばなかったのに来てくれたんだね」

「おつ、お前……！ 私が空気読めないヤツみたいな言い方すんな！」

「今年が私が呼んだんだよ。祈の同性の知り合いは少ないだろう？」

「あーね。そりやそうだ」

悟を祝いにきた人がほとんどいない……。

例年の誕生日とかどうなつてたんだろうか。

かなり目立ちたがりだから、たぶん大々的に開くと思うが。

果たして人は来るのだろうか。ちよつとかわいそう。

解放された頬を手で冷やしながら軽く撫でる。

今日ももちも肌である。荒れのない、美少女の肌だ。ふふん。

肌のケアに関しては家計を握ってる権限を悪用してがつつりとしている。

最初の監禁生活よりも美少女度が上がったので、もうこれは人間の領域を超えちゃった美しさだ。

「で、はじめましてね、祈ちゃん。私は庵歌姫^{いおりうたひめ}。よろしくね」

「あ、はい。よろしくおねがいます」

「……………」

「……………」

「硝子、ひよつとしてこの子ってすごい子？」

「あー、はい。ちよつとナルなどころがありますが、それでも基本は素直ないい子ですよ」

「僕に似てるね！」

「祈ちゃん！ こいつみたいにはなつちや駄目よ!!」

「え、ええ……？ なりませんよ、こんなクズに」

「うわ、なんか懐かしい響き」

「そうだねー。まだ二年のときだったっけ」

悟の高専時代のことについて、詳しいことは知らない。けれど、少しだけひつかかることがある。

悟の同期の友人は、一体どこにいったのだろう。ここにいないことから、なんとなく推測はできる。けれどオレは、それを指摘することはなかった。目に見えている地雷を踏むほどバカじゃない。けれど。

少しだけ、五条悟に同情した。今度はちゃんとした意味で。

「いやー、楽しかった」

「ん。片付け疲れた」

「主役なんだし任せとけばよかったのに。そういうところ真面目だよ
ね」

「それくらいしかできることないし」

もう一度、「真面目だねえ」と言っつて、悟は黙った。

「ケーキ食べれる？」

「用意してたの？」

「夜中、任務で出てったじゃん。だから作った」

「手作りね。なんのケーキ？」

「ショートケーキ」

「食べよう」

とのことなので、用意しておいたものを冷蔵庫から出す。

大皿に移し替えて、取り分けるような小皿も二つ出す。

「フォークとスプーンはどっちがいい？」

「普通フォークでしょ」

「へー、そうなんだ。じゃあそうするー」

ということ、フォークを二本。

「あ、飲み物ってどうする？」

「……どうしようか……ここはカフェオレでいこう」

「ん、了解。オレはココアにしよつと」

実は甘党なもので。

カフェオレはインスタントのステーキクを用意して、お湯が沸くの

を待ちつつ。

ココアは牛乳をレンジで温めてから作る。

ちゃんと淹れられればいいのだけれど、それはなかなか難しい。

いつかは習得する気でも、今できないのなら意味がない。

……来年にはできるようになるう。

「おまたせー」

「おー、ありがと」

持つてくる前に切っているの、あとは取るだけである。

皿に取り分けたものを差し出すと、悟はさつさとフォークで取って食べた。

「おー。また料理うまくなったんじゃない?」

「こんなのレシピ見たら誰にもできるだろ」

少なくともオレにはできた。

だから、これについて、オレが深く思うことはない。

ただあるがままの事実を述べる。

そのまま、のんびりと食べ終える。

外はすでに真つ暗だ。充足感もあり、そろそろ眠気も襲い来る。

「そういえばプレゼント買ってきたよ」

「えー?」

「なんでそんな嫌そうな顔するの」

だって、ろくなものを買ってきそうにないもの。

そう思っていたが、渡された袋を開いてみると、そこには未来では当たり前になったもの。

「スマホだ」

「ケータイ持つてなかったよね? せっかくだし最近流行りのを買ってあげたよ」

「おー……」

「あれ、要らなかった?」

「いや、ごめん。想像以上にちゃんとしたものがきて驚いてたところ」
自分でも酷いな、と思った。

iPhone 4だ。性能的には古いし、まだLightning」

ネクタじゃないところが時代を感じさせる。

けれど、それでも嬉しいものは嬉しい。

「一応僕の電話番号は登録してる。あと今日来てくれたやつらの電話番号も登録させといたから、これでいつでも連絡とれるよ」

「……ありがと」

あー、くそ。

こういうとき、表情が動きづらいのはいやだな。

だって感謝が薄く見えるし。

「すげー嬉しい」

◇

そう言って、五条析は笑みを浮かべたのだった。

2011年1月22日 土曜

「――帰ってこねえし」

いったいどこでほっつき歩いているのか。そう思つてケータイを確認すると、『飲みについてくる』との簡潔なメールが届いていることに気づく。

ため息一つ。そういうのはもつと早くに言え、と思いつつ、とりあえず今日は樂をしよう。

「んー、髪が長いとやっぱ邪魔だなあ」

冷静に考えて十年もの間切っていないのだから、そりやあもう大変伸びてしまっている。

監禁生活から出るなり整えはしたのだが、切つてはいない。

このかわいさを支える重要なフアクターだと思つたからだ。

とはいえ、しばらく過ごしてみるとすぐに気づく。髪が長いって不便すぎる。

それも、だいたい太ももあたりまでの長さだと特に。

そのせいで髪を洗うのは時間がかかるし、座るときに床につかないように一旦持ち上げる必要があるし、なにより頭がすごく重たい。

かわいいと言えはかわいいが、それでも限度がある。

髪型で遊べるのは楽しいといえは楽しい。つらさを帳消しにしてくれるところもある。

ある、のだが。

「そういえば髪つて呪いの媒体に使いやすんだよなー」

切る理由をこうして思いついてしまったので、これは切るしかない。

ということ、肩甲骨あたりまでばつさりカットする。前髪も、横に流してなあなあにしていたものをカット。

これだけでも大分すつきりした印象になった。

が、まだ足りない。横髪を切つて、少しずつ縮めていく。

「よし」

先程までの異常な長さは脱却。

これで一般的な長めの髪くらいまでになったんじゃないだろうか。ふふん。

こういうカッティングもできるなんて、やっぱりオレは天才である。

袋に集めた大量の髪。これをここから利用することに。

オレは腐っても五条家の人間なため、呪力の保有量自体は高い。

とはいえ、術式の利用の際に出力される量は常に一定だ。

つまりこの呪力の利用先は、反転術式の使用あるいは肉体の強化にしかされない。結界術を覚えられればまた違ってくるのだろうか。

家入さんと初めて会った日のあと、オレの目について推察を立てた。

オレの体の元持ち主は、生まれる前に死んでいる。

そして、オレの転生のタイミングはきつと——彼女が死んだ直後だ。

術式は基本的に一人一個だ。

他者が真似することはできない。

が、別人が利用する方法はきつとある。例えば呪具に宿った効能は正確には術式のようなものだと思っ正しいはずだ。

とはいえ呪具はそのほとんどが、自分自身で呪力を持ち単体で機能する。

よって、オレのイメージしているものとは少し乖離する。

オレの本命はこっち。

両面宿儺というものがある。

悟から聞いた呪いの王だ。遙か昔の存在であるが、その指は未だ現存している。

特級呪物という形で、莫大な呪力を未だ秘めており壊すこともできない。

唯一の例外とすれば宿儺を身に宿してもなお、正気を保つことのできる人材を見つけ出し、それを殺すこと。

それで宿讎の殺害はできる。

が、それはリスクだ。当然ながらただの人間がそんなことをできるはずもなく、故に宿讎は受肉しない。

あるいは、獄門疆や九相凶。

どれも特級呪物。これらは全部、難易度と前提条件をとにかくとして「使用」することが可能。

そう、「使用」だ。

呪物は「使用」することができる。

そしてそのどちらも、元は術式を持った存在であるということ。他人の術式を利用することは、おそらく可能だ。

術式が宿ったものを操ることができれば。

それで、きつと機能する。

だからこそ、オレは彼女の体に生まれつき備わった術式と、オレの魂が所有している術式のどちらも使うことができるのだろう。

これはあくまでも推察だ。

そして、オレ自身が所有している術式は——きつと、モノの性質を「反転」させる術式なのだ。

その重ねがけの結果が、「蒼」の瞳と「赫」の瞳。

しかしこれが正しければ、少し怖い。

だって、オレの目玉をえぐり取ったらきつと、それで「蒼」は使えってしまうのだから。

ということだ。

この身に溢れる呪力を用いて、防御用の呪具を作ることにした。少し怖くなってきたからね。

美少女で天才って自分の才能が怖い。ふふん。

それに、髪に未だうつつすらと残っている呪力が勿体ない。どうせなら有効活用したいものである。

「——できたー!!」

呪力を相当使ったが、それでも完成させることができた。ふふん。これはすごいんじゃないだろうか。

作ったのは下着である。

いわゆるブラキャミ。といってもこれはやらしい理由があるわけじゃなく、その形があくまでも理想だったというだけ。

髪の毛の量的に服を作るには足りないが、それでもこれなら広めの面積を覆うことができる。

オレの髪から作っただけあって、呪力との親和性は非常に高め。

莫大な呪力をこめつつ、命とまで評される女性の――オレの髪の毛を利用して作成したことによって、防御力も相当なスグレモノ。

ついでに呪力で操作することによって伸縮するので、成長にもちやんと適応する。

ふふん。

さっそくつけてみた。

悪くない。自分の才能に惚れ惚れする。天才とはやはりこういうことを言うのだろう。

「ただいま〜」

「おかえりー！ 見てこれ！ すごくない!？」

丁度いいタイミングで帰ってきた悟に、早速自慢しに行く。

あ、顔が赤くない。酔ってないのかな。ひよっとして飲んでないのだろうか。

「すごいでしょ!」

「んー? ……ああ、ひよっとして自分で作ったの？」

「すげー、鎖帷子みたいじゃん。器用だねまったく」

「天才でしょ」

「まあ、立派な呪具にはなると思うよ。機能はどんな感じ?」

「アホほど呪力こめたし髪使ってるからすごく固いと思う!」

「なるほどねえ。あ、で、祈。デザートかなんかある?」

「えー、オレ用に買ってきたのあるけど……」

「ちようだい」

仕方ないので渡すことにする。

夕方の買い物でもっとデザート買ってこるべきだった。そう思ったけれど後の祭りである。

ほしいものがあるならメールしてくれたり買ってくるのに。

「まったく、硝子の飲みに付き合おうと疲れるな」

「え、あの人そんなアレなの?」

「アホほど飲むよ。高校のときから煙草吸ってた筋金入りだぜ? そりゃあ酒にもハマるに決まってる」

へー。

「逆に僕は飲まない。飲んでもノンアル」

「あー、ぽいわー」

「ぽいって何さ」

「え、そのまんまの意味だけど……」

それ以外に何があるのだろうか。

そう思っで見つめれば、「まあいいけどさ」と帰ってきた。

いいらしい。彼の中でどんな考えがよぎったのかわからないが、とりあえずはそうらしかった。

「——で。すぐく今更なだけどさ。寒くないの?」

「……あ」

忘れてた。

いそいそと服を着る。

寒さが今更やってきた。

ちよつとばかり遅いんじゃないかと思う。

呪いの考察は規模が大きいのでわからなくなる話。

「……鬱陶しいなあ」

時計がかちこちと音を鳴らす。

術学的で不躰なそれは、まるで現世の理から外れたような独特の響きを携えている。

とはいえ、こうもやかましくカチカチカチカチと聞かされると、鬱陶しくもなるものだ。

いつそのこと全部破壊してやろうか。そう思つて、目に呪力を宿す。

「はいストップー」

「むぐえっ」

と、そのタイミングで猫のように襟首を掴まれた。

喉が絞まらないように配慮されている。そういう優しさがあるならもつとちゃんと抱き上げるとかの選択もあったらうに。

しかしながら、ルール違反をしたのはこつちだ。

その点においては反省しなければならぬ。

「……これ、ホントに壊しちや駄目？」

「駄目駄目。効果は説明しただろ？ んー、やっぱり精神感応に対する耐性がないね。」

これだと洗脳の術式なんかに出くわしたらアウトかも？ 呪言も

きつと効きすぎる」

「呪言は呪力でガードするときやいいんだろ。だったらできるよ」

「不意打ちでも防げると思うかい？」

いくら呪力操作がうまくても、戦闘ができるとは限らないんだよ。

僕の無下限のガードだって条件が整えば無効化されるんだし」

むー。

オレがやっていたのは、術式への対抗だ。

呪術には精神に対して影響する術式も当然多い。

一般の呪術認識というものは「相手を病にする」などといったものがポピュラーだ。

病は気から。

つまり、この場合「気を削ぐ↓病にする」といったプロセスも成り立つわけで。

そういうわけで、精神に対して働きかける呪いは多い。というか、メジャーな部類だ。

誰もかれもが攻撃的な術式を持っているわけじゃない。原始的な呪いというものを行使する呪術師——呪詛師は当然存在する。

特にオレは最強こと五条悟の、生きた付け入る隙である。

スマホを入手したことでオレの危機が悟に伝わりやすくなったとはいえ、それでもそういう状況に陥らないように、オレがなるべく対処できる必要がある。

ということ、悟に頼んでみた。

すると精神に対して働きかけてくる呪物を利用して少しばかり訓練することに。

ちなみに今使っているものは、異常にうるさい時計。

針の音で自分を破壊させるように誘導し、破壊した人間に自己破壊の衝動を呼び起こす。

オレがそんなことになったら、自分自身に「☒」をぶちかますことになりそう。

いやでもこんな美少女をオレが壊すことなんてあるか？

オレは美少女だぞ？ そんな呪いくらい鏡を見て克服できるんじゃないだろうか。

と思っただが、これの恐ろしいところは「ただうるさいだけ」、また「自己破壊が条件」というところだ。

自分の存在の消失は最大限の対価となる。

縛りとしてもつとも重い。故に発動する能力は強力になる。

なんて傍迷惑な呪物なんだろう。

それにめちやくちや陰湿である。

見た目はいい感じのアンティークなものだから余計にそう思う。

プレゼントを装って呪殺とか、そういう使いみちなのかもしれない。

人を呪わばなんとやらというから、そのために入手した自分自身が死ぬことになるかもしれないけど。

撤去されていく時計。

そんなに雑に放っておいていいんだろうか……。

「祈は呪いの理論とか察しとか、まあ頭いいんだろうね。けど実践となると極端に弱くなる。」

要は頭固いのかな。どうしても理屈を優先しようとしてる」

「それはまあ、そうだけど……」

「硝子タイプかな。それが「窓」。どっちにしたって矢面に立つのは向いてない」

知ってる。

けれど、どちらも状況によつては戦地に赴くことだつてある。

そういうときに対処できるようにならなきゃいけないのである。

悟には「術士としての訓練のため」と主張した。

だから術士としての評価をされている。

つまるところ、オレは現状術士として向いてないんだろう。

「まあ、場数を踏めばどんどん慣れるさ。術式自体はすごくいいんだ。

どうにかなるって」

そういつて悟は締める。

それが気休めのための言葉とはわかっていた。

わかっていても、それで大丈夫だと思ってしまう自分が嫌だった。

呪力はどこにでもある。

というか、呪力はおそらく「それらしい行動」によつて生産される。生贄を用意する。それを恐怖させて殺す。

取り決めを用意する。その条件を満たす。

——こんなふうになれば、おそらく呪力を生産することは可能だ。

また、絵画などの芸術的領域でもよく「魔力」などというワードが利用される。

魔法は学問としての呪術と言い換えてもいい。

世界の神秘は、実のところ一本化される。手段や目的が変わってくれば、当然のように言葉は移り変わるのだ。

そのため、この魔力というものは「呪力」に置き換えることが可能。芸術的領域での「呪力」は、強烈に目を惹きつける要因と考えていい。

それはある種極まった技法に対して使われることもあるし、また別の分野で使われることもある。

そうなる——そうなる、だ。

呪術理論とはまた離れた領域に近づいてくるが、呪力を誘引・発生させる記号というものがおそらく存在する。

これはおそらく呪印とは異なる。

それは技法の中に混ざり込んでいるのかもしれないし、また別のところに介在しているのかもしれない。

——が。

現高専生にはこういう術式を持つ人物がいる。

顔を隠すことで自らを霊媒にし、降ろした力を利用することができるといふ術式。

これは少しばかり穿った解釈になるが、おそらく「持物^{しぶつ}」だ。

顔を隠すための布。

それを用い、自身を降霊させるものであると正体を特定させる。この特定に関しては本人の意思で行える。

持物は絵画技術である。現代でもよく利用される技法。

いわゆるイラストワークの「決まりごと」。またの名をアトリビュートとも呼ぶ。

基本は西洋絵画の見方としての常道。

最近では萌え絵というもので溢れかえっている。当然そのファンアートだつて多く存在するわけだ。

このとき、目の描き方が同じで体つきが似通っている場合の、個人の特定手段は？

髪型や服装、持ち物などである。

つまり持物とは、道具や身につけるものなどによってその持ち主の

存在を確定することができるもの。

逆説的に、道具を利用することによって別の存在の力を応用しているというのがオレの意見だ。

アトリビュートを利用すれば、おそらく別の大きい存在の力の利用が可能。

例えば逸話などからの呪力の引用が可能となる。

「……ん！ ひよつとしてこれか!？」

「お、どした?」

隣を歩く悟に、オレの考えた結論を披露。

「呪力って、おそらく関係性がきつかけで発生するんじゃない!？」

ふふん。天才である。

こう思ったきつかけは簡単だ。

持物によってパイプをつくり、そこから呪力を引っ張ってくる。

逸話レベルともなると当然大量の呪力と強力な能力を持つが、その呪力はどこから持ってきたのか。

決まっている。畏れなどからだ。

恐怖は繋がりになりえる。

故に多くの人が繋がり、それによって発生した呪力がどんどん流れ込む。

ふふん。どうだ、この発想。

「呪力はまだまだ謎なことも多いから、ひよつとしたらそうかもしれないね。」

でも祈

「ん?」

なんだろう。この完璧な考察に穴はないと思うけど。

「関係性っていうなら、この世の何にでも見いだせるし……広くなりすぎない?」

「あー」

考証とか難しいよね。

だからこれはあくまで仮説にすぎず、また立証するアテもないと。「それじゃーまたあとで」

「ん、じゃーね！」

ということ帰宅。

部屋に入って、机の上にメモがあることに気づいた。

『授業に使いたいしこないだ祈が作ったやつ借りてくね〜』

……いや待て。

髪の毛の残りに小さいバージョンながらスペアも作って、今は洗濯してるけど。

いやそれでも待て。干している洗濯物を確認。

ない。

「あいつ絶対殺す……！」

いくら呪具だからとはいえ人の下着取ってくって、流石にそれは超えちやいけない一線じゃない？

近年でのでかいことといえばって感じだよね。

「——つーことで、任務なわけだけど……ぶっちゃけ私には荷が重
よお……学生にやらせないでよお……」

「同感だけど、今年に関してはやっぱりどこも人手不足なんだから。

てーことでいくぞ梓^{あすき}、気張っていきましょー」

「うう、いのちゃんがいじめる！泣くよ!?!」

2011年、7月。

強力な呪霊の大量発生により、オレにも任務が回ってくるようにな
った。

本来は高専に匿われている立場で外に出てはいけないとされている
オレも、駆り出されている。

形振りかまってはいられないらしい。

ということ、オレとしてははじめての呪霊退治の仕事だ。

「わかってると思いますけど——危ないと思ったら退いてください。

二人ともまだ未来を背負ってるんですから」

「わかってます」

「……では、帳を降ろします。ご武運を」

ため息一つ。

一級としての認定は特例でされているのだが、だからといって経験
が伴っているわけではない。

だから、正直な話をする不安だ。

呪胎。

特級仮想怨霊に成長する可能性を持った呪霊だ。

初陣は既に済ませているが、少なくとも呪霊との戦闘経験一ヶ月未
満の人間に戦わせるものではない。

が、それでもなおオレが行かなければ行けない理由がある。

今回の呪霊の生息地には、何人もの人間が閉じ込められているの
だ。

術士も非術士も含め。

おそらく死んでいない。が、すぐに治療しなければ死ぬだろう。

だからこそ特級に通用する可能性が高く、軽度ながら反転術式による治癒を持つているオレが派遣されたというわけだ。

ぶっちゃけオレを殺そうとしてるんじゃないかとは思いますが、しかし相手である彼女は一度特級を祓った経験だつてある。

「そういえばいのちゃんさあ。ごじよ先生からなんかもらつてたよね。ラブレター？　なんて書いてあつた？」

「んー？　まだ見てない。あとで見ろつて言われたから任務終わつてから見ようかなつて」

「ラブレターなのは否定しないんだ。にへへへ」

「あつちげえ今のなし！　忘れて！」

「やー。にへへ」

やめろや。

なかわたあずさ
中綿梓

高専二年であり、準一級術士だ。

その服装は戦地に赴くとは思えない、ふざけたくまさんきぐるみ（顔は出ている）。とはいえこれも冗談というわけではなく、彼女の術式に必要なものなのである。

「……煙つてる？」

「火災かもね。あー、なるほど。たしかに火災への恐れだつて溜まつてるか。時期が時期だもん」

そう言えばまあそうだけど。

ずけずけと奥に進んでいく。

随分とシンプルな構造の建物だ。

——生得領域は展開されてないらしい。

この調子だと接敵はすぐだろう。とはいえ、地下に入り組んでいる場所らしいので少しばかり厄介だ。

「……いたな」

見つけたのは、おそらく被害者の姿。

肺が大きく動いている。生きていることを確認し、梓と顔を合わせ
て頷き合う。

そして、オレはゆつくりと近づいた。

「……肺が焦げてるっぽいか。これなら治せる」

目を通して、正のエネルギーを用意する。

それをゆっくりと通し、体の欠損を埋めるように正常な形に治していく。

よし。

これで治癒は完了なはずだ。

意識が戻った彼らに、帰り道の方向を教えて撤退してもらおう。

術士も混じっているのならきつと大丈夫だろう。

「見事なもんだねー。私ったら反転術式さっぱりだよ」

オレも正攻法じゃやり方がいまいちわからないけど。

とはいえ、そういう事情をあんまり言って良いわけでもなく。結局黙るのだった。

「さて」

残るのは、奥に続く部屋のみ。

そこがどんな惨状になっているのかはわからないが、おそらくそこに標的はいる。

そういう雰囲気がある。

「いくか」

部屋の扉の前に立って、

——「赫」を放った。

出力最大で放ったそれは部屋に充満していた煙を吹き飛ばし、その奥にあった壁を突き破って空気の通り道を作る。

強制換気である。

「……やってなかったら危なかったかもー」

「一酸化炭素中毒で普通に死ねるなあこれ」

だからこそ締め切っているのだろうか？

ともあれ、部屋の中に丸まっているそれを見つけた。

呪胎だ。

おそらくもう目覚めるのだろう。

今のうちに仕留めることができるのがベスト。

「オレが」

「了解」

言葉は少ない。

両目に呪力を籠め、「☒」を放つ——が。
上空に勢いよく飛び出したその姿を認め、効果がなかったことを悟る。

正面に大穴が空いた。これですますます戦いやすくなる。

「目覚め」「か」

「喋った……？」

声が二つ聞こえたのは気のせいか。

いや、違う。きつと実際に二つ声が発声されたのだ。

喋る呪霊。それも流暢に。

つまり、等級は相当に高い。

なるほど。特級に扱われるわけだ。

「いのちゃん、呆けてる暇はないよ！」

「わかってる！」

いままで「☒」の脅威はバレただろう。相手もきつと相応に注意をしてくるはずだ。

みなぎった呪力。それを惜しみなく身体強化に回しつつ、オレはどう動くのかを模索する。

「我が名は」「大火^{たいか}」

火災の呪霊ということとは間違いない。

ということは、術式はおそらく火に関連するもの。

先程の煙もおそらくはその効果。

——おそらくは、その煙が効果の本体。

相手に火とともに病毒を撒き散らす術式。

こういうときに、ニュートラルな無下限の術式がほしかったと思う。

ないものねだりをしてても仕方ないとはわかっているのだが。

「言葉が通じるとちよつとラクかも」

と、声が響く。

接近した梓が、呪霊の体に拳を叩き込んでいた。

一撃一撃が重たいそれ。

到底細身の少女の体から繰り出される攻撃とは思えないほどの一撃は、大火と名乗る巨体を大きく吹き飛ばしていた。

吹き飛んだところを、オレが「蒼」で引き戻す。

帰ってきた呪霊に対して、梓は正確に蹴りを通した。

「私の術式はシンプルだよ。自分の着てる服のイメージで基礎能力が変わるの。」

ほら、どう？ このくまさん。かつこよくて、かわいいでしょ？
とにかく、わけがわからないほど強そうじゃない？」

術式の開示。

シンプル、故にリターンは少ないが。

それでも彼女にとって、少しの強化は莫大なものである。まるで無限に思えるほどに。

速度を増した拳が呪霊の顔面に叩き込まれた。

が、それをものともせず指で印を結んだ姿を見て、すかさず「蒼」で彼女を引き寄せる。

「半焼」「半焼」

つまり全焼だなわかった。

途端に燃え盛る呪霊の姿。退いたのは正解だ。

そして、炎を纏った大男がそこに立つ。

「第二ラウンドかな？」

「んー、これで終わりだと良いねえ」

大火

大火と名乗る呪霊。

特級だ。

それも比較的上澄み。おそらくは領域だつて、既に使えるだろう。そうなった場合、勝ち目は無い。——中綿^{なかわたあずき}梓はそう思う。

彼女は領域対策を有していない。

過去倒した特級は、領域展開されたが辛うじて倒すことができた。

しかしそれは敵の術式との相性がよかつたからだ。

もしも領域が、煙と火の充満した世界だったら。

間違ひなく二人は死ぬ。

故の猛攻は、しかしながら成果に乏しい。

相当な攻撃力があるコンビであることは間違ひないだろう。彼女の攻撃は、頑張れば二級を一撃で仕留めることだってできる。

しかし、術式開示と縛りをかけた現状であつてもなお、攻撃が通用している感じがしない。

「——遅いんだよ、このやろう！」

頭を下げて、攻撃を紙一重で回避しながら吠える。

攻撃は遅い。動きも鈍い。

けれど、威力は違う。

あまりに巨大なものが落ちる感覚、というのか。

ゆっくりであるように見えるが、その破壊力は計り知れない。

そしてそれ以上に受けられないのが、大火の纏っている煙だ。

現状殴つても何も効果がないことから、おそらく相手からの攻撃が決まったときのみ発動するのだろうその効果。

おそらくは中毒で昏倒する。

——現状、決め手がないわけでもない。

彼女の相方が持つ、謎の衝撃波。

アレをヒットさせることができれば少なくともは手傷を与えることが出来るだろう。

だがそれを当てるためには、

「工夫しないとねえ……！」

だから彼女も、本来の姿を解き放つことにした。

「――解放：^{チェンジ}龍形態!!」^{ドラゴン}

かつこよく決まった。

それが術式効果を高め、そして――彼女の姿が変化する。

着包み?化。

彼女がそう名付けた技。

着包み内部から着包みを展開、装着し、外側にある着包みを脱ぎ捨てて術式。

変化のときにはどの形態になるのかを宣言してからでないとは変換できない。

そして、かつこいいタイミングで決めなければそのパフォーマンスは著しく下がる。

最初から装備している熊の着包みを愛用するのは、全形態の中で一番バランスが取れているからだ。

無条件で強い。汎用性に優れた着包み。

逆にこれは、丁寧にお膳立てしてやることで無類の強さを誇る形態。

彼女が特級を退けられた所以は、多様な相手に対応できる拡張性の高さとそれを丁寧に繰る無類の術士センスによるものが強い。

「がおー」

何かある、と判断したのだろう。

大火が周辺を炎で振り払った。

爆風が、多くのものを退ける。

しかしそれは中綿梓には効かない。なぜなら龍は炎を従えるもの。強固な鱗は耐熱性に優れている。

火事程度の炎では、怯みも退きもしないのだ。

(攻撃力が高い。触られると不味い。でもそれならそれでやりようなんていくらでもあるんだよ!)

この局面で龍を出したのは、スペックが最上位ということだけが理由ではない。

龍は炎を繰る側だ。

故に、酸素不足での中毒など効果はない（と彼女は思っている）。

「速い」「強い」

「お褒めに預かり光栄ですつとー！」

敵は炎を纏っている。普通に殴ろうとすれば手が焼け焦げるだろう。

だが龍ならば。

——振り抜いた拳が、大火の巨体を吹き飛ばす。

瓦礫をぶち抜きながら飛んでいくその姿を、五条祈が屈折させるように正逆に反転させて、再度吹き飛ばす。

しかし大火も馬鹿ではない。一度やられたことは、当然覚えている。

引き寄せられるように戻ってきたその勢いのまま、彼は梓に拳を突きつけた。

正面にいてもそれに当たるほど間抜けなつもりもなかったが、更に手札を隠されていると不味いので回避を選択。

横合いに逸れることを選択する。

そこに対応するように即座に襲い来る攻撃。

（速くなってる）

ほとんど変わらない。

だからそれは気づいたというより、半分以上野生の勘だ。

けれど勘はこれまでの経験の発露。彼女にとって、自分の勘以上に信じられるものと言えば五条悟が最強ということくらい。

だから疑わない。彼女はほんのわずかな直感で、相対している特級呪霊の格を見抜く。

今年は本当に人手不足が酷いようだ。

彼女なんかがこんな大層な呪霊と戦わなければならないのだから。格闘。地面から抽出したエネルギーを、正面に放つ。

対する大火は拳をクロスしてガード。みしりと腕がきしみ、ロウソクのような火がちろりと舞った。

それを不味いと認識するには、ほんの数瞬遅く。

拡大し発散された莫大な熱量が、彼女の耐性を貫通して柔らかい肌に焼け跡を遺す。

(着包みは破れてない。セーフ。セーフか？ マジで言ってる？ 全然セーフじゃないでしょこれ)

油断はしていなかった。けれど、意識の外の攻撃。

狙ってやったのだとしたら——やはり。

相手は、この瞬間にも学習している。

間違いも、疑いようもない。

「加速するよ」

宣言通り、中綿梓は加速した。

攻撃の手を緩めない、その一撃。

顔面に向けて拳を放つ。同時に腹へと向けての攻撃も左手で。

それを受けられれば、しゃがむようにして足を払う。

転がした相手の腹へと叩き込むのは龍の爪。

なのに。

爪痕一つ残らない。

——想定済みだ。

だからこの攻防の本題はそこではない。

そこから放たれたのは砲撃。

龍のブレスだ。

特級相当の呪力砲は、大火の体を吹き飛ばす。

「……見事」「強い」

「ははっ、どうだみたか」

「故に、慢心はない」「全力を持って殺す」

「そりゃあいいや」

それは大火の意識が中綿梓に向いた瞬間。

——無下限呪術の秘伝、その最大出力が放たれた。



露骨に警戒されることはわかっていた。

故に、大技を放とうとするタイミングを狙って「☒」を撃つことは最初から織り込み済みだ。

『たぶんいのちゃんの必殺なら、普通に殺せる。防御とかもぶち抜いてね。』

だから、私も大技を撃つ。そのあとに紛れるようにして撃つて『成功するとは思わなかった。』

正直なところ、オレは「☒」を何度も撃てる。だからこそ、一人ならばこれを連射していただろう。

しかしながらそれだと被えたかどうかもわからない。だからこれでよかった。

そういうことにする。

「☒」で消し飛んだ体。

それは既に、修復すら難しいほどに崩壊している。

「うひゃー、すごい威力だねえ。いのちゃんすごい」

「ふー、一件落着かな？」

——待て。

帳が上がってない。

呪霊を倒したあとに上がるはずの、帳が。

直感に任せて呪力でガードを固める。

しかしそれも遅い。

振り向いた顔を横合いから殴り飛ばされた。

一瞬、自分が生きているのかわからなくなるほどの浮遊感と、視線の回転。

地面に落ちたと気づいたのは頭に痛みが走ってからだ。

「……いった」

声に出したが、喋った感覚はない。

意識が遠のきかけている。そんなに耐久力がなかっただろうか？

視界は明滅。ゆっくりと意識を手放しかけ、自分自身を「赫」で吹き飛ばす。

飛びかかってきた大火をそれで回避できたのは、本当に運がよかった。

そして今の「赫」でなんとか気付けは完了。
頭こそ回らないが、これでどうにか戦いは継続できる。

「は……はあ!? どういうこと、今確実に死んだはず……!」
死体のほうに目を向けた梓が、はっとしたような息を呑んでから舌打ちした。

「やられた……! そりゃあ強いに決まってる! だってあいつ、火災の呪霊なんかじゃない!!」

どうということだろうか。

もう足取りもおぼつかない——これは、最初に警戒していた状態だろう。

やっぱり食らっちゃダメなやつだったか。

「声が二重だったのも……! あいつ、家火事の呪霊だよ! そこから転じて火の車! 昔からずーっと有名な怪異……!」

「はあ」

オレにはもうよくわかんないけど。

また意識を落としかけたオレの腹に、拳が二度叩き込まれる。
血が口からこぼれた。お腹は潰れてないだろうか。

気休めにしかならないが、反転術式を使って治癒を始める。

「は……は——は——」
痛い。

こんなに傷ついたのはいつぶりだろうか。

はじめてかもしれない。はじめてじゃないかもしれない。

もう、覚えてない記憶の中にあるのかも。

「だから身長が250cmくらいだったのか。——ってことは」
せめて最後ににらみつける。

「☒」の破壊の嵐がすべてを呑み込んでいく。

それを空中に浮遊することで回避した大火は、こちらを見て。

「——恐ろしい」

手で印を結んだ。

「させるかあ——!!」

と、翼のように紐をはためかせ、梓が空を駆ける。

地面へと叩き落とすように、手を盛大に破壊する。
自分が術式に罹ろうと、関係なしに。
それによって呪印の成立を阻止——したが。
小さく揺れる炎が、大火の体に印を刻み込んだ。

「領域展開」

そして、世界は色を変える。
恣意的に歪められた世界。まるで焦土のようだ。
熱はない。けれど、全てが燃え尽きたような——終わった世界。
ここが地獄というのなら、それで納得できるような。
そんな光景が、目の前に広がっていた。

「ああクソ……！ 私ミスだ……!!」

梓はその表情を大きく歪めて、叫ぶ。

「ふざけんよ、クソ、せつかく、せつかく……」

「冥冥阡焦禍」
めいめいぜんしょうか

——わからない。

頭が全く働かない。

けれど、今この状況が不味いということだけはわかった。

「……げほっ」

咳き込んだ喉から、血がべつたりと零れ出た。

心臓がきりきりと痛む。

息ができない。

見れば、梓も地面に手をついていた。

「いち、に、さん……わかった。この領域内での、あいつが隠してた本

当の術式」

ゆっくりと立ち上がって、彼女は言う。

「三分——三分以内に倒さないと、私たちは死ぬ」

領域

領域・冥冥阡焦禍。めいめいぜんしょうか

その領域について、オレは何も知らない。

梓はその正体をわかつているようだが、オレはもうそれすら思いつくことはない。

意識が曖昧。

……いや、もう無理だ。それどころじゃない。

考える余裕もない。

ただわかるのは、彼女が言ったことがホントなら……オレはきつと、もうすぐ死ぬのだろう。

「……あークソつつつ、頭回らないよ！　ほんとに厄介な呪霊……!!」
舌打ちが聞こえてくるようだ。

それでも、意識を途切れさせないためなのか、彼女は声を振り絞るようにして術式の考察を並べる。

「最初から二体の呪霊だったんだ……！　それが重なり合ってて、死んだときに分裂する……」

「生ながら、火車にとられし女の事」がベース。だから二人いるし、身長は2.5 mだし、術式は三にきつと関連する」

そのうえで攻撃してくる大火に、梓はふらふらになりながら回避を続ける。

どうやらオレのほうは放っておいても死ぬと思われたようだ。

不味いと思っっているが、体は動かない。そして頭もだ。

もうなにをしたらいいのかわからない。

胸に走る鈍痛。体が歪んで、何か削れていく感覚。これが寿命だろうか。

違うのかな。

考えるたびに、頭に鈍痛。喉は焼けたように痛い。お腹はもうなくなつたんじゃないかってほどだ。

「三秒じゃなかった。三時間でもないだろう。ましてや三日なんて、特級呪霊がそんなことを許すわけがない。」

だから三分。三分で少しずつ『あの世』に連れて行かれる術式が、この領域のキモ……!」

ああ、だから。

この痛みは魂の痛みなのだろうか。

きりきりと痛む。血が溢れる。穴は空いたら戻らない。

「げほっ、ぐゅっ、あああ喉痛いなあ! つたく!」

彼女も体をボロボロに焦がし、喉を焼かれ、血で咳き込みながらも戦っている。

オレには何ができるだろうか。——何もできない。

「せつかくできた後輩……こんなところでなくしてたまるかって……!!」

彼女にはもう呪力もないだろう。

手のうちようがない。

詰みだ。

きりきりと。

痛みが強くなってきた。

いや、これは喪失感だ。

何を喪っている?」

「……しっかり、しろ、オレ……」

天才だろう。

それが取り柄なんだろう。

ここで動けなくて、どうするんだ。

しっかりしろ、伊野幸人。お前のせいで五条祈は死んでしまうぞ。

……少しだけ、考える余裕ができてきた。

この状態で戦えるなんて、梓はすごい。

オレには絶対無理だ。

けど、オレには考える頭がある。

『あの世』……つまりは地獄に送る術式ってことかな……それはなにを? 体ごと? どうやって?」

体ごと引っ張っていくなら、時間制限はないんじゃないや……ってことは……今干渉されてるのは、魂とか……意識とか」

この考察は間違っていないだろう。けれど、考えるたびに対策がわからない。

だって人間、魂っていうものを自覚できないんだから。

対策ができるとしたら——それで、二人生き残る道があるとしたら。

これ以外にはない。

領域展開。

呪術の深奥。呪術戦の頂点。

相手が領域を展開しているのだから、対策するにはそれ以外にない。

でも、無理だ。

そもそもやり方がわからない。どうすればいいのかも。

そしてもしできたとして、洗練の浅い領域ならば確実に押し負ける。

つまり、生半可な領域ならば、きつとそのまま死ぬ。

使えば呪力は底を尽きるだろう。それ以外にも問題はあ

無下限の領域——『無量空処』むりようくうじょ。

これは、六眼を持たないオレが発動することは難しい。

無限を知覚できないオレが無限で領域を満たそうとしても、おそらく脳の処理に負担がかかりすぎて——おそらく死ぬ。

一分。

魂の損傷が激しくなってきた。

削られていくのは心。

「——あれ」

幻覚か。

気のせいか。

今、オレは、この感覚と似たものを思い出したような——。

『——領域 展開』

目に浮かんできたのは、見覚えのない情景。
五条悟に掴まれ、その側から見上げている景色。
無量空処。その影響に、オレはおかげで置かれなかった。
だからこそ一人だけ見ることができた。その印の形も、その領域が
どんなものかも。

——無理だ。

できるわけがない。

そんなの人間技じゃない。

そもそも、やったところでオレは死ぬ。やってもやらなくても関係
なく死ぬ。

ここでその選択を切るより、天命を待ったほうがよくないか？

ポケットの中の紙を、取り出した。

悟から渡された紙。

中に何が書かれているかなんて、わからない。

けれど、それを握りしめた。

「——梓！」

「」

声に反応し、彼女はオレのほうへと駆けてくる。

美少女の超ちっこい体を持ち上げ、そして一瞬で大火から離れる。

「オレから離れないでね」

「うん！」

紙を親指で撫でる。

震えそうになる体を気力で押さえつけ、既にズタボロな喉から血を
零しながら。

できるかわからない。

でも、オレは領域を見たことがある。

あるのなら、どうすればいいかなんて——わかるだろう。
だって、オレは天才だ。

天才で完璧で強くて賢くてえらくてかわいくて、とにもかくにもありとあらゆる分野で世紀の美少女なのだから。

「——領域展開」

【無量空処】

展開された領域が、冥冥^{めいめい}阡焦^{せんしょう}禍^{わざ}を呑み込み——そして満ちていく。
領域のせめぎあいには、かくしてオレのほうに軍配が上がった。

——それがたった、2秒限りの展開でも。
領域展開。

その呪力消費以上に、自分の脳で知覚できないほどの処理を行ったことが原因での脳の崩壊。

しかし……それでも、オレはよくやった。
最後の希望だけは守り抜いたのだから。

「龍流崩天」

それは卓越した技術が生み出す絶壊。

無量空所の影響下、完全に棒立ちになった相手に放たれた中綿梓の一撃が——その心臓を、貫き穿つ。

そしてそれだけに留まらず、爪が首と体を分かち、上半身と下半身が断割され、そこから更に縦に両断される。そして、帳はやつと晴れたのだった。

◇

「——あのさ。今回に限っては僕もありえないでしょって思うんだよね」

「そりゃあそうだ。術士歴一ヶ月の子供にこんな重い任務を任せるなんてありえない。」

「それがいくら強くても——な」

「上の連中かな。彼女と僕の教え子を殺して嫌がらせはいラツキーってか？ ——ふざけんじゃねえ」

「五条家の可能性もある。彼女は家族を呪殺した忌み子だろう？ そんな相手がのうのと生きているのが、耐えられない人間だっているんじゃないか？」

「そういう連中は僕が『結婚』の手段を取ることで潰した。六眼持ちと特異体質の彼女。その子供への期待は反対意見を黙殺して余りある。」

「だから可能性があるとしたら上じゃない？」

「なるほど。——彼女自身が反転術式を無意識に回してるおかげでなんとか間に合った。脳への後遺症がいつまで残っているのかはわからないが、少なくとも一命は取り留めたぞ」

「ん、グッジョブ硝子」

「誰に言ってるのさ。——って、五条あんた。彼女に対しては本気だったんだな」

「……まあね。恋愛とかじゃないと思うけど」

ベッドに横たわっている五条祈。

その脳みそは、無限を処理しようとした負荷でとろけかけていたが、辛うじて生還。

情報を処理しきるまでいつまで掛かるのかは不明だが——それで

も、彼女は生きている。

それに安堵を覚えることに、五条悟は安堵を覚えていた。

「あ、センス。いのちゃんはとうでした？」

「生きてるって」

「ほんと!? ……よかった……」

入ってきたのは、松葉杖をついた着包み少女。

彼女は、近くにあつた椅子を引っ張ってきてから彼女をじっと眺める。

「あ、センス。私、呪術師続けるの難しいらしいんだ」

「……………」

「今回の件で後遺症が残ってしまった。それも肉体ならばまた違うが、彼女の場合は魂にだ。」

「反転術式では治せない」

「……………そうか」

「あ、でもね。結界術を覚えたら『窓』のほうにはなれそうだから、これからそつちにシフトするつもりだよ」

と、準一級術士は告げる。

術士不足が著しい現代。

彼女が抜ける穴はどれほどになるのか。

そして、彼女も。

五条は、目覚めない少女を見た。

今日もこうしている間に術士はどこかで死んでいる。

永遠にも続くように思えるマラソンゲーム。

その果てにあるのが——術士かのしよの死だとしたら。

「うん、頑張つて！ わからないことがあつたら伊地知に聞けばいいから！」

そうふざけて、湧いた疑問は洗い流した。

「そういうばさ、いのちゃんが持つてるこの紙、センスからの手紙なんだよね？ なんて書いたの？ ラブレター？」

「別にそんな大層なものじゃないさ」

そう。

こんなふう握りしめて離さないでいるようなものではない。
そんな価値なんてない。
むしろ怒って捨てるのが当然なくらいの、ただのちよつとしたいた
ずらでしかないのだから。

少女が去って、一人になった病室。

五条悟は彼女の頭に触れてささやく。

「早く起きてよ。そのときまでこれはお預け」

彼の手に握られているのは、彼女の手の中にある四つ折りのメモ用
紙のような簡素なものじゃない。

しつかり封筒に入った、ちゃんとした手紙だ。

「渡せることを祈ってる」

◇

ぴりりりり、と間の抜けた目覚ましの音がする。

叩いて止めると「お……おは……よう……」とまるでゾンビのよう
な声が朝を告げた。朝から気分が悪くなる。

電池を変えればいい話だが、それはそれとして面倒くさい。

だからオレは電池を変えないことにしている。

「あーねむ……って今日日曜かよお!! なんで早起きしちまったんだ
よ……」

と、思ったがニチアサが見れるのでいいとしよう。

オレが部屋から出ると、わらわらと出てきた弟と妹。

なぜだか久しぶりに見たような気がする二人だった。

その感覚が奇妙で、一瞬面食らう。

「おはよー！ 兄貴！」

「おはおは……ねむ」

「おー。おはよう、洞爺とうや、瑠璃るり」

「おはよう！ とーう！」

まだまだ幼いのに洞爺ってなかなかスゴイ名前だよな、と思いつ

つ。
オレは二人を追って一階へと降りるのだった。

「いつもどおり」の日常

今日はいい日だ。

なんとなくそう思った。理由なく思うわけがないので、ひよつとしたらオレの心境に何かあったのかもしれない。

だって、いつもどおりだ。

今日は至っていつもどおり。

普段と代わり映えのしない一日でしかない。

高校生の朝は早くない。それが自堕落野郎となると尚更だ。

けれど日曜朝になんたなく目覚めてしまったのだから仕方ない。

洗顔をして、鏡で顔を見た。

「……んー」

鏡が映し出すのは量産型高校生の顔。

どこか怪訝そうな顔をした、どこにでもいる、特徴のないモブ顔だ。

異世界召喚系主人公にはなれそうにもない。

いや別になりたいとも思わないが。

なぜだか、違和感があった。

まるでこれが自分の顔でないような——そんな違和感だ。

「いやいや……別に、いつもどおりのオレの顔だろ？」

「どーした中二病？」

「いや、別に……。おはよう、母さん」

「おーおー。……ま、ちよつとばっかオマエ入院してたからね。そういうこともあるでしょ」

「入院？　なんで？」

「私が聞きてーんだよ全く……こないだトーキョーいったつきり、ばったり倒れやがって。そんで自分には記憶がないとききた」

そう言えば、そんなこともあったような気がする。

どうしてオレは東京なんかに行ったんだっけ。

高校二年。

進路も考え始める時期だ——オープンキャンパスにでもいったのだったか？

いや、違う。思い出した。

パーティーを盛大にしようということ、東京のほうに行ったのだ。

「なんかあった気がするんだけど……」

「おーおー、オマエったら私の心配をよそに二週間寝込んで、帰ってくるなり普段どーりなんだから」

「え、心配してくれてたの?」

「そりやあそうさ。親なめんなよ? いくらテメーのガキに嫌われようが、私が一番オマエのことを好きで、心配で、愛してやらねーでどうするんだよ」

「……そー」

そう言われると、どことなく気恥ずかしい。

軽く目を逸らすと、母親はオレの頬をぐにーと引っ張った。

「や、やめろっ、痛いっ」

「……なーんか、嫌がり方が女々しくね? どした? こっそり女装とかしてた?」

「や……やらねーよ馬鹿!」

「おーおー母に向かってその口の利き方はなんだあ? いいのか? 親はガキのケツ叩く権利があるんだぜ? うりうり」

「馬鹿に馬鹿つつつて何が悪い」

「よっし百回」

「ちよっ……寄るんじやねえ! やめろ! ヤメロー!!」

「うるさいぞ兄貴! ちよつと静かにしろー!」

オレだけかよ。

逃げるようにしてリビングに飛び込むと、弟が睨みをぶつけてくる。

まだ幼い顔で、全く怖くない。

「なんだア? 兄貴に向かってその態度は」

「瑠璃寝たんだから黙って」

「ごめん」

昨日夜更ししたのか、妹はすやすやと眠っていた。

オレの後ろから顔を出した母親も遅れてそれを見る。そして、「あ
ちやー」と頭を抑え。

「昨日は修羅場だったからねえ。ちよつと手伝ってもらってたらこの
ザマか」

「修羅場って……何やってたんだよ」

「文旦？いてた」

「あー」

修羅場というのはおかしいと思うが、それでも文旦を？くというのは
は重労働だ。

それを手伝わせようとして夜更しさせたんだろう。

「ちなみに何個？いた？」

「瑠璃は二十六個」

「アホか」

「ジジイが食べるかな。この程度すぐ捌けるよ」

戦果を享受するのはいつだって大黒柱ということか。

家計を支えているぶん、と言えば聞こえはいいが……それでも、だ
からといって当然のような顔で食い尽くされるとムカつくものだ。

……はて。

今の感想はいつたい、どこからきたのだろうか？

オレは実際に文旦を？いた覚えはない。ないが、それでもどうして
かその実感が今あった。

「ところでユキ」

「あつ」

オレがいつたいどうだったかと記憶を漁っている隙に、母が肩を掴
む。がっしり。逃げられない。

ていうか痛いくらいだ。

「ようやく隙を晒したな」

「ま、待て、話せばわかる」

「問答無用」

指導。

「……っーかさー、ユキ。あんたなんか雰囲気変わったね」

「うん？　そう？」

「なんつーか、前は『無気力ですー』ってオーラ出してたけど……なんつーか、今は活力あんじゃない？」

「どした？　夢でもできたか？」

「……いや」

夢。夢か。

「まーったく。夢のゆの字も見つからねえや」

人生なんて適当にやっけていても生きていけると思った。

昔からなんだって、そこそこのラインまでいくことができた。特段努力なんてしなくても、オレの人生はこのまま進んでいくのだろう。

適当な大学に入って、適当な仕事について、適当にアニメとかゲームとかで休日を潰して、そして——適当に死ぬ。

どうしてか、そういうものだと思ってしまう。

やりたいことなんてない。

将来の仕事で、何かしたいことなんてなにもなかった。

大学受験は指定校推薦を適当に受けようと思っっている。だから、今の段階で面接の話すネタは探している。

その大学に入って、自分が何をしたいか。

そんなのはどうでもよかった。興味はないし、知らないし、それでも適当にやれば一時の失敗や恥はともかくとして、なんだかんだで入ることはできるだろう。

そういうものだと思っっている。

「そうかあ。ま、私としてはこのままニートにならなきゃ別にいいんだけど。」

——ああ。夢ができれば、ちゃんと言えよ？　それがどんなものであれ、私は応援してやるから」

「……了解」

でも、そんな機会はきつとこないだろう。

なぜなら、オレにやりたいことなんてできるはずがないから。

「え、にーちゃん夢ないの？　おっくれってるう」

「何が不味い。言ってみろ」

「オレには偉大な野望がある！」

と、洞爺は堂々と胸を張って言った。

「へえ？ なになに？」

「ウルトラマンになる」

「そこは今見てたライダーにしところや」

「ライダーもかつこいいけど……でも、ウルトラマンのほうがいいや」
「なんで？」

それは、単純な疑問だった。

いやオレが昔仮面ライダーになりたかったということは関係ない。
ないから。

「だって、でかいんだぜ？ あと空も飛べる。」

オレみたいに強くなくてもさー、サイガイキュージョとかならでき
そうじゃんか！」

「おー、いい夢じゃん！」

「まじかよ母さん」

「こんな夢くらい追いかけてよせ、折角の人生なんだから」

母親は、オレと弟の頭を豪快に撫でる。まるで犬をわっしわっし撫
でるようなその手から逃れようと軽く身じろぎ。

「……ま、夢に破れた馬鹿の戯言なんだけどね！」

「よく言うよ、同人活動続けてるくせに」

伊野^{いの}うず。仕事として塾勤務をしつつ、趣味でイラストレーターと
して活動中。

同人誌も毎年出すなど、現在も鋭意活動中。

母親はやりたいことを持ちすぎた結果、器用貧乏になってしまった
タイプの人間だ。

——それは、打ち込めることがたくさんあったということだ。

そしてその幅を減らさなかったために、公務員である教職ではなく塾の
講師を選んだ。

少しだけ羨ましく感じる。

「おー。つってもただDL販売だけだからな、まだまだだよ」
「なにその直販目指してるんでみたいな……」

「私はまだ登り始めたばかりだからよ、この険しく長い同人坂を……」
アホがなんか言ってる。

「……おはよう、かな？」

「おっ、おはよー。目え覚めたか？」

「ん。おにーちゃんおはよ。手の振り方女の子みたい」

「やめろよそういうこというの」

「そうだぞ瑠璃、気にしてるんだから……気にしてるんだよ兄貴二学期の50メートル走11秒で盛大に笑われたこと」

「なんでオマエが知ってんだ洞爺ああおい?？」

「持久走補走常連らしいじゃん。マジで運動苦手だよ」

「やめろやめろバスケだと3ポイントシューターだったので重宝されてんだよこれでも」

……オレは致命的に運動センスがない。

投擲だけならできるが、走るとなるとほんとに苦手だ。

おそらく骨格が走るのに適してないのだろう。別の体になれば走るのだからうまくなるはず。

まあ、オレは頭脳だけでも天才なので。

IQ200なので。

「うわ、おにーちゃんってそんなに雑魚なの……?」

「雑魚って呼んだら魚に悪いレベルだよ」

「だなあ。50メートル11秒は笑えん」

「じゃあオマエら何秒なんだあ!?! 言ってみろ!」

「8秒」

「6秒」

「6秒。まあ昔の記録だけど」

「畜生……こいつら足異常に速い……」

上から順に瑠璃、洞爺、母親である。

なんでその運動センスがオレに遺伝しなかったのだろう。父親か。父親のせいかな。

インドアを極めた父親のせいなのだろう。

「おはよう」

父親が起きてきた。

あくびのせいか、目に涙が浮かんでいるのをごしごしと拭って、声をかけてくる。

「おー、おはよー」

父親が、椅子に座りながらこちらを見て。

「……魔女裁判？」

「いや、普通にいじめられてるだけ。ていうかなんで魔女？ 女？」

「その筋肉で男は無理でしょ」

「テメーも似たようなもんだろうがあ!？」

あんまりな言い分だったので、流石にキレた。

——部屋に戻って、パソコンを起動する。

そこでようやく一息ついた。

スマホを見ると、友人からのラインの通知。軽く返事しておく。なにか忘れていたような予感。それについて考えようとすると、扉が控えめにノックされた。

「なにー？」

「入っいいい？」

「おー、いいよ」

来たのは弟だ。

扉を開けて、彼を部屋に招き入れる。

「で、なんの用？」

「モンハンしょ」

「えー、ダブルクロス？ まあいいけどな」

3DSを取り出して、PCから音楽を流す。

オレは基本的にゲーム音を聞かない。目で見て避ける。そんなオレとは違って、弟は自分のほうで音を流し始めた。

ローカルで部屋を作ると、弟がすかさず入ってきた。

——と思ったらもう二人入ってきた母親と父親だこれ。

無駄にHRも高く、超特殊許可クエストを制覇した証である王冠も

最大な二人が装備を見せびらかしてくる。なんだこいつら。

まあ、やるというのなら仕方ない。音楽を止めて、それからスリープモードに。

「リビングいくぞー」

「んー。ねえ、兄貴」

部屋から出ようとして、弟の呼びかけに声の方を向く。

「兄貴はさ、いなくならないよね？」

「はあ？　なるわけねーだろ」

明瞭じゃない呼びかけだ。

ひよつとして、オレが二週間病院で意識不明だったっていうので不安になったのだろうか。

案外かわいいところもある。

だから、オレは安心させるように言う。

「いなくならねーよ、大丈夫だ」

「約束する？」

「おう、約束」

「……そっか。だよな！」

笑顔になった。

うん。これが正解だ。

と、そのタイミングで弟の3DSからちりんちりんとは度も鳴り響くクエスト準備完了の合図。

「——連打してんじゃねえ!!」

2018年12月7日 土曜日

伊野豪太^{ごうた}。

伊野純^{じゅん}。

祖父母の名前である。

ちなみにこれは父方のほうだ。

母方のほうの両親はなくなっている。

オレが子供のときに。

——だから、もう顔も、声も、やりとりもほとんど覚えていない。それでも思い出そうとしたら寂しくなる。

それはきつと、魂とか……そこらへんに刻まれているものだ。

葬式が嫌いだ。それは別離を想起させるから。

だからこそ、オレは——きつと、なろうなんかで語られる主人公にはなれないのだろう。

なろう系。

そう言われるものがある。オレが好んで読んでいるもの。

無料で読める。それ以上に、そこにはオレの目を惹きつけてやまない何かがあった。

それは。

それはきつと、オレが悲劇よりも——喜劇を求めているからに違いない。

主人公がいれば大丈夫。

こいつがいれば全部解決する。

そういう、無条件での寄りかかりを求めている。

なろう系には批判も多い。

それは物語の整合性がとれていないとか、基本的にワンパターンで飽きるだとか、単純につまらないだとか、緊張感がないとか、パクリだとかなんだとか。

パクリはさすがのオレでも難色を示すが……けれど、いわゆるテンプレなろう系は、オレにとって一つの救いのものであった。

別に退屈が裏返る予感なんて求めていない。

オレの日々の退屈は、一生付き合っていくべきものだ。

それでも、学校やらで行われる地震だとか外国の児童がどーたらだとか、そういう話を聞きたびに頭の中にそれがこびりついて離れない。

どころか、辛辣な現実をえぐり出す物語を見たときにすらそうなつてしまう。

それを、感受性が強いとカテゴライズすることは簡単だ。

そして実際にその通りなのだろう。

だからこそ、オレはストレスフリーな話を求めている。

物語の中だけ、完膚無きまでにわけがわからないほど強いキャラが、悲劇を打ち砕いていくさま——それが見たかった。

だから、オレは馬鹿でありたい。

オレは馬鹿で、何も考えてないようなやつで、だからこそやることなすこと無茶苦茶で、人から憎まれることのない。

そんな人間でありたかった。

けれど、実際はそんなことはできない。

オレは恥を捨てられない。だからこそ、どこにでもいるような、ただの高校生にしかたれない。

だから、馬鹿になれるヤツが羨ましかったのだ。

「——いえーいクリスマス！ パーティー!!」
「正確には違うだろ……」

母親の声に、オレだけがぼそつと返した。

本日は12月7日。

祖父母宅にて、クリスマスパーティー。

どうしてかはわからないが、今年はこのタイミングでやることになったのだ。わけがわからない。

まあ、金曜日なので夜まで騒いでも問題ないだろう。

せっかくのパーティーなのだから、羽目を外すくらい許されるかもしれない。

クラッカーで火薬臭くなった部屋を換気。

窓を開けると「ぐえー寒い」だなんて言ってくる面々がいるが、だったらそもそも他人の家でクラツカーを鳴らすな。

「全く、オマエらダメ人間どもは……」

「いーよ、ユキ。むしろじゃんじゃん賑やかにしてもーて」

「えー……じゃあ、そうするけど。あ、ばあちゃん。なんか手伝うことある？」

「じゃあオレ手伝うてくれや」

「なにするかによる」

「餅つくぞー!」

「新年かよ」

クリスマスパーティーだってことわかってんのか。

ていうか爺ちゃんの杵早すぎるから普通に手潰されそうなんだけど。

ちなみにこれまで3回潰されたことがある。痛かった。

「豪太さん、もう作つとーよ」

「おー、そうか? じゃあオマエ、アレ出せい」

「はいはい」

——祖父母のやり取りは、時代の差を感じさせる。

訛りが強いからか。それとも、そのやりとりの気兼ねなさからか。

どうにも、タイムスリップしたかのような気分させられるのだ。

「そうだ、ユキ。魚切って出しといて」

「んー? いいけど、失敗しても文句なしだぞ?」

「いいよ、いいよ」

ということなので、台所でいぎ包丁を握る。

どういうわけか、なんとなくどうすればいいのかわかったので、卸して刺し身を皿に盛り付ける。

オレの手際を見た婆ちゃんは、感心していた。

「手慣れとうね。これならお嫁にいつでも困らんわ」

「おい婆ちゃん、オレ男なんだけど。お嫁にはいけないんだけど」

「……あれ、そうじゃったか。いかんいかん、なんか雰囲気がそれっぽかったけん……」

と、そう言われて首をかしげながら鏡を見る。
……女っぽい？ そうだろうか。
それを言われて喜ぶ男はいないと思うが。
なんというか、わずかにそれが正しいような。
そうあるべきなような気がして、自分自身がわからなくなった。

伊野幸人。

家族や親しい友人からはユキと呼ばれている。

最近学校やら家やらで、「なんか女子っぽくなった」だの「美少女感がでてきた」だの「なんだオマエ乙女か」だのなんだの言われるようになった。

以前はそんなことはない。

一体何が契機かと考えれば——きつと、東京に行ったことなのだろう。

オレが入院する前。空白の記憶。

そこで、一体なにがあつたのだろうか？

思い出そうとすると、それを拒むかのようにモヤがかかる。

それは記憶に留まらず、オレの意識にすらかかり始めるので、これが大変だ。

意識を喪うのはたまらないので、そのことについてこれ以上考えるのはやめることにした。

そのうち勝手に思い出すだろう、と考えながら。

「魚！ 魚食わせろ！ おい！ おい緑次よりつき！ オマエ一人で食つてねえでこつち回せや!!」

「実に美味なり」

「ぐわーっつっこいつ殺す!!」

食事中に戦争を始めやがった両親二人は無視する。

その場の全員が動じていないあたり酷いものがある。

一体何なんだこいつら。どうやってこれまでの人生を生きてきたのやら。

「兄貴、兄貴、どうしたの？」

「いや、なんというか……頭痛くなってきた」

「えっ!? 大丈夫!? 死んだりしない!?!」

「しないしない単純にその馬鹿ふたりのせいだから」
いくらあの馬鹿でもこんなことはしなかったぞ。

そう思つて、その馬鹿とやらが誰だったかと疑問になる。

馬鹿? ——ああ、あいつか。

そういえば年末には帰ってくるのかな。

そうだといいな、と思つた。

そんなオレを、婆ちゃんはじつと見ていた。

普段は絶対にこんなことはないが、ふと空が見たくなった。

どうしてだろうか。

何故か、無性に見たくなったのだ。

空は雄大だ。

まるで無限に広がっているかのように。

いいや実際に果てしない。

オレが今見ている輝きは、何十何百何千年何万も前のものである可能性だつてあるのだから。

「——どしたん? そんなして」

「ん、婆ちゃん」

普段柄でもないことをやっているからか、祖母に声をかけられた。なんて言おうか。少し迷つて、口を開こうとして。

「——あんた、好きな人でもできた?」

そう、声がかかった。

「んなわけねーよ」

すぐに返した。

すぐに返せた。

そんなわけがない。

そう、そんなわけがないのだ。

なぜなら相手に心当たりがない。

「本当?」

「ホント。オレにはそんな相手できそうにない。

どっちかといえば、そういうのは兄ちゃんの役目だろ?」

「それもそうやね」

それで納得されるのもちよつと……って感じだが。

まあ納得されたならされたでいいや。

「……なあ、婆ちゃん」

「あん?」

「いや……なんていうか……オレ、そんなに雰囲気変わった?」

「変わつとーよ。なんやる……言葉にしづらいけどな」

オレが無意識に聞いた言葉に、祖母は即答する。

なんでそんなことを聞いたのか、自分でもよくわからなかった。

でも、どうしてかそれが気になったのだ。

「まるつきり変わってるんよ。それがどうしてかもわからんけど。まるで数年以上会ってなかったみたいにな——そうやね。薩摩みたいな変わり方よ」

「……そつか。じゃあ、そういうこともあるのかもな」

薩摩は兄の名だ。

はつきりと、変わったと思ったのは大学に入ってから。

内向的だった性格は鳴りを潜め、……なんというのか。軽薄馬鹿にクラスチェンジした男。

兄もひよつとして、自覚がなかったのだろうか。

だったら——きつと、それと同じことだ。

「まあ、でも、きつとこつちのほうがあええんやろうな」

「……は? なんで?」

「だってユキ、前より活き活きしとるように見えるよ」

「……………」

じゃあ、と言って、祖母は去っていった。

残ったのは、窓際に立つオレ。

「……………」

そのまま、ぼーつと三十分ほど外を眺めていた。

それだけの時間を見ていたら、流石に飽きてきたので、リビングへと行こうとした。

「——ユキがさ、生きててくれてほんとによかったって思うんだ」

そこへとつながる扉を開こうとしたとき、そんな声が聞こえてきて手が止まる。

父親の声だ。

「あのとき、なくなってる人がたくさんだったから……ひよつとしたら、ユキもそうなる可能性があるのかもって、すごく怖かった。

……だから、生きててくれてよかったって、見ると泣きそうなくらい思うんだよ」

「……だよ、ねえ。私もそうだよ。まったくもって同じ。……原因不明の大量不審死……ニユースで見たときは、そりゃあ……な」

「あのとき何があったのかは、まだわかっていないんだな？」

母の声に続いて、祖父の声。

「まだ。……きつと、大変なことが起きたんだろうね。それこそ、自身で記憶を閉じ込めちゃうくらいには」

……そうなのだろうか？

いや、待て。

そもそも、なんだ。その大量不審死っていうのは。

全く知らないし、覚えもない。

何かが起こったことは間違いない。

あのとき——あのハロウインの日、東京で一体何が起こったんだ？

わけがわからない。

思い出そうとすると、意識はかすれゆく。

……。

その多くの犠牲者の中には、ひよつとしたら。

「僕はさ。性格悪いんだよね」

どこかで聞いたような言い回し。

それがどこだったかは覚えてない。

「だから、あの事件でたくさん死んでも——ユキが生きててくれたことが嬉しいんだ。薄情かな」

「別に性格悪いってほどでもないだろ。三桁後半？ 四桁？ なんにせよ、それだけの中の一人にテメーの息子が入ってなくてよかったって、そんなのは当然の反応じゃない？」

「そうかな」

「そうだよ」

「でもさ。ユキにとってはどうなのかな」

オレにとって。

その言葉が聞こえたとき、オレは一瞬考えてたことを見透かされたような気分になって、心臓がきゅつと音を立てたような気がした。

「ユキってさ。自己肯定感低いよね」

「まーな」

「あの子が、もしもこの件について知ってたらさ。絶対に、思い詰めるでしょ。」

最悪、自分が死ねばよかったとまで思いそうじゃない？」

そんなことはない。

そんなことはない……はずだ。

オレはそこまで脆くない。

ただ、思う。

もし、本当に何かあったとして。

それを全部覆せるだけの方法があったんじゃないか。

例えば、転生チートなんかあったら——現実に起こったそれもどうにかできて、全員が助かったんじゃないかと。

「だから、内緒だ」

父親の声。

「あの子には言うな。絶対に。絶対に言うな」

もう、リビングに入ることではできなくなっていた。

オレは廊下にもたれかかりながら、中の言葉を聞く。

「言わねーよ。ママの気遣いなめんな」

「そうだね。君はそういう人だ」

声がする。

ゆつくりと背中がずり落ちていく。

「——あの子は、あの日以来少しだけ、何かに真剣になってる」

「……そうだな。見ればわかる」

「だから、ちよつとずつ……ちよつとずつでいいんだ。ちよつとずつ、あの子がやりたいことを、僕たちに教えてくれるようになったら。そのときは——」

もう言葉は耳に入らなくなっていた。

上を向く。

オレはそれから、暫くそこに座り込んでいた。

浮かれた馬鹿は死ね

「——んくー、っはあ……疲れたなあ……」

勉強は嫌いだ。

けれど、それでもテスト勉強はしておいたほうがいいだろう。そんな漠然とした理由から、いつも勉強することになっている。

オレは基本的に100点を目指して70点を取るタイプの人間だ。勉強した問題がわからず、適当にやった問題をさつくりと解けてしまうタイプ。超天才肌と呼んでも差し支えないだろう。

そういう人間なので、正直な話をするとならないほうがいいのだろうが……けれど、オレがこれをしている理由とすれば一つ。

要するに、安心がほしいのだ。

人はいつだって安心を求めている。……らしい。

どこかでそんな話を聞いた。どこだったかは覚えていない。これまでの人生の、無数の物語の一つなのだろうとはあたりをつけている。

そりやあそうだ。特にオレなんかは、他の人よりも臆病なのだ。

何をするにしても理論をまず立てて、それからでないと何もできない。い。

ぶつつけ本番でやろうとするとミスをする。

失敗したくない心理。そんなのが働いているのかもしれない。けれど正直に考えると、失敗するとかしないとかそういうのは言っても意味がないのだろう。

それもひっくるめて『安心がほしい』なのだから。

ということ、テスト期間になるといつでもデスクに向かっていく。

勉強は嫌いだ。単純に面白くないから。

それでも、昔からそこそこはできた。

日本史なんかは教科書をぺらぺらと流し読みするだけでほしいの内容を把握できたし、理科目については基本的に勉強をしなくても理解ができてしまう。

ケアレスミスで一問程度間違えてしまうことが常だが、それでも内容自体は完璧に入っている。

その他教科も同じくだ。

なんのためにこんなことをするのかわからない。

勉強は大事だ。それは知っている。けれど、それが将来何につながるのかというところにだけは想像が働かない。

——オレは。

オレは一体、どうしたらいいんだろう。

こんな生活が一生続くと思っている。

そしてそれから脱却することはできないと思っている。

諦観か、それとも……。転がした言葉の中には何も無い。

空洞。それでしかない。

「——イエーイたっだいまー！ パーフェクトお兄ちゃんが帰ってきたぞ愚弟どもー!!」

——だから、そんな声がよく響くのだろうか。

声の発生源をたどってリビングに降りると、そこには下のふたりをぶら下げた兄が立っていた。

「よーユキ。ようようようよう、よーう」

「いきなり何。うざい」

「今の反応、カノジヨを思い出すなあ……。どした？ 女装でもした？」

「殺すぞ」

「おっ、いいね。それがオマエらしいよ」

と言って、兄はなぜか掛けているサングラスを下ろす。

赤色に染めた髪がやけに眩しい。落ち着きがない色だ。へばりついた弟がその髪を引っ張ると、兄は絶叫した。

「やめろ洞爺！ ハゲ、ハゲる！ オレの高貴な髪がハゲる!!」

「別に兄貴は高貴じゃなくね」

「辛辣だな!? おいユキ！ オマエどんな教育してんの!?!」

「オレに聞くなよ……母さんだろ」

「それもそうか」

それで真顔になるのだからあの母は一体なんなんだ。

ソファーに倒れ込むように座った兄が、洞爺を右、瑠璃を左腕にぶら下げて手を持ち上げる。

そしてカットインが入りそうな決め顔をしてから。

「やべえこれ腕くっそつらい」

「じゃあオレ勉強するから」

「ユキー！ オマエ！ 兄を助けようとは思わないのか！ 薄情者

!!」

うるせえよ。

階段を上がっていく。

「あ」

「……は？」

と、二階の廊下で両親と遭遇。

何故か映画泥棒のコスプレをした母と、何故か「うるせえエビフライぶつけんぞ」とかかれた白い全身タイツを装備しエビフライを天高く抱えた父。

「……」

「「……………」」

ばたん。

「待て待て待てユキなんか反応しろや！」

「ソウダヨー。なんか褒めるとかあるじゃん？」

「オレテスト勉強するので……あの、帰ってもらえますか？」

「敬語!?!」

「うわーん息子によそそしい態度とられたー」と言いながら去っていったのは父親だ。なんで母親よりあざとい反応なんだろう。

ため息一つ。

そしてオレは、再び教科書と向き合い始めた。

「……んー」

さつきから、妙に引つかかって仕方ない。

記憶をくすぐられている感覚。

何かを忘れているかのような。

思い出せ、と警鐘を鳴らしているかのような。

ルーズリーフを取り出して、ペンを筆箱から取り出す。

母親が「道具は良いの買え……買え……」と言っていつも購入するジウリスという少し値段の高いルーズリーフ。

その書き心地は素晴らしく、ついつい思考をまとめるために書くようになってしまった。

とりあえず、適当にペンを走らせて――。

「へえ、イケメンじゃん。なんのキャラ？」

「ひゃあ——!？」

びつくりした。

単純にびつくりしたのもそうだし、自分の反応にもびつくりした。

まさかこんな女子みたいな驚き方をしてしまうとは……。普通に恥ずかしかつたので、紙で顔を隠す。

「なんだなんだいきなりいつの間に入ってきたきやがつたくそあにき」

「そんな驚かなくてもいいじゃん……ていうか、それなんのキャラだよおいユキ、オイオイオイオイ」

「すごいすごい……」

咳払い一つ。紙を顔から離して、机の上に置く。

オレは別に絵が上手いというわけではないが、ルーズリーフに描かれていたのはまるでずーっと見てきたかのように細部まで鮮明な、一人の男のイラストだった。

髪は真っ白。サングラスをしていて、その奥にある目は蒼を携えている。服装はカジュアルに黒色で統一されたもの。シンプルな服装だが、堂々とした着こなしだ。イケメンは羨ましい。

見覚えは――ない。

ないが、どこことなく引つかかるところがある。

「なんのキャラかは……知らん。適当に描いた」

「オリキャラ？」

「モデルはあるはずんだけど……」

「わからない、と。なんだそれ」

「なんだろうなあ」

まあ、と続けて、兄貴は言う。

「わからないなら——思い出す必要もねえだろ」

「……は？」

「は？　ってなんだよ。辛辣すぎない？」

オレ別に変なこと言ってるよ。忘れたことはいつか思い出すだろ。それまで、変に考えず忘れたままにしといたほうがいいぜって話」

「なんで？」

「人間が一日に思案できることの幅は決まってる」

兄はよくわからないことから語りだした。

「ネガティブな人が他の人よりも無気力なのと同じだよ。」

悩むことにすべてのエネルギーを使っているから、それ以上のことをするエネルギーが消えてしまう。つまり、思い出すために悩むことはそれだけ非効率的ってこと」

「……あのさあ。それ、正論？」

「かもな」

こぼれた言葉は、無意識だった。

「オレ、正論嫌いなんだよね」

言ってるから気づく。

心配から声をかけてくれた相手に対しての言い分じゃない。

やってしまった。訂正しようと言葉を紡ごうとして、詰まる。

「……そうか、そうか」

「……は？」

兄は笑っていた。

気分を害してもおかしくないのに、兄はそれでも笑っていたのだ。

意味がわからない。

意味がわからなかった。そんなオレの頭を、まるで最高に面白いショーでも見たかのように笑っている兄が撫でる。

「いや、ごめん。ちよつと——嬉しくてな」

「……嬉しい？」

「ユキが、嫌なことを嫌だつて言えるようになったこと。

だってオマエ、いつつも嫌そうにしても、それを全部呑み込むじゃんか。ガキの頃からずっとそうだ。もつと我儘になつてもいいのにつて、何回も思つてたよ」

「……」

「……で。オマエはどうしたい？ 忘れたそれを思い出したいのか、それとも忘れたままでいたいのか」

わからなくなった。

まるで、オレのことをずっと見てきたかのような言葉だつた。

兄がそんなことを思つていたなんて、オレは全く知らない。

波風立てない生き方。

それが美德だとされてきたのは、いつからだろう。

適当に生きるためには、適当に人と迎合していったほうが楽だ。

自分を押し通す必要はない。

そう思つて、そうしてきた。

けれど。

「……」

答えられなかった。

オレにはどうすればいいのか、どうしたいのか。

「おーい、兄貴！」

「——洞爺」

沈黙を切り裂いたのは、扉を開いて顔を見せる弟の声。

「モンハンしよーぜ！ 三人でやるの、久しぶりだし！」

「おー、洞爺。ちよつとだけ大事な話してるからね、明日でもいい？」

「えー、明日かよー！ あとでじゃ駄目なのー？」

「無茶言うなよ。明日つてだけでも結構な条件だぜ？ そもそもユキ

はテスト期間なんだからあんまりゲームやってられないんだ」

「……むー、わかった」

そう言っつて、弟は引き下がる。

「じゃあ兄ちゃん！ 兄貴！ 明日やろうなー！ 絶対だぞー！」

「……おう」

「ごめんなー」

ばたり、と扉が閉まる。

オレは、決断できずにいた。

——それはきつと、思い出してはいけなにかだからだ。

2018年、10月31日。

あの日に何が起きたのかは、きつと……。

「何が怖い？」

兄の声だ。

これまでにないくらい、優しい声音だった。

普段ふぎけた姿が嘘のような。そんな声。

「……わからない」

返答は、やっぱり簡単だった。

何が怖いのか、オレには何もわからない。漠然とした不安だけがつきまとっている。

それはきつと、すべてを思い出したときに……何かが終わってしまふという、恐怖からだ。

「昔話をしようか」

「……え？」

「オマエが産まれてきたときの頃の話だ」

兄は、そう言っつて笑った。

オレと兄は七歳差だ。

兄弟としてはかなり年の差が離れている。

というのも、兄とオレは血が繋がっていない。

兄が二歳のときに、父親のほうの嫁が亡くなった。事故死だったらしい。

そして父親と、まだ赤子の兄が残された。

そのあと、父親と母親が再婚する。
そういう関係性だ。

それでも家族としてやっていけたのは、きっと兄がオレを受け入れてくれたからだろう。

「まだガキの頃だったけどさ。すげー嬉しかった。

これからの人生にオマエがいるんだって思うと、すごくわくわくしたよ」

今オレが使っている勉強机に手をあてて。

「これはさ、オレが家から出ていくときのお下がりだよな。

そうなるって思ってたからさ、なるべく耐久性の高いいいヤツ買ったんだぜ。あげるってときに、あんまりいい顔しなかったけど」

「それは……ごめん。あのときは、荷物を載せ替えるのが嫌だった」

「そんな理由だったの？」

なーんだ、と兄は笑う。

少しだけ、申し訳ない気分になった。

「こっちの腕時計はバイトして買ったらオマエにいつの間にか渡ってたやつ。PSPもそうだな。高かったんだぞ、コノヤロー」

「……恨んでる？」

「全然。いや、正直言ったら少しはいらつとしたりもしたよ。でもそれ以上に、ちゃんと欲しいものがあつたんだなってなって、よかった。誕生日プレゼントもお年玉もねだらなかつたもんな」

「ほしいものは、もうあつたし」

「オレはほしいものはいくらでも欲しいね。もらえるっていうのならいくつだつて候補を出す」

きつと、これに関してはオレのほうが変わっているのだと思う。

本来は兄のほうが正しいあり方……かもしれない。

いいや、どっちが正しいとか、間違っているとか、そういうのではないのだろう。

どっちもどっちなのだ。

「——オマエの名前はさ。オレの案なんだぜ」

と、兄は言った。

これまで自分の名前の由来なんて、興味を持ったことがない。学校の授業で聞かれたときも、親に聞くのは気恥ずかしくて適当にでっちあげたのだったか。

だから、それは初めて知る事実だった。

「オレは、ガキのときにちよつとだけ他よりも奇特的な経験をした。生みの親が死んだっていうな。」

正直覚えてないけど、母さんが本当の母さんじゃないっていうので、少し戸惑った覚えもある」

「……うん」

「だから、オマエはそんなことがないように——幸運で、幸せなヤツでいてほしいなって。そういう意味だ」

——伊野幸人。

オレの名前。

子供らしく捻りのない、直球の中の直球なネーミング。

けれど、それはだからこそ、どこまでも思いが詰まっているような——そんな気がした。

「——オレ、思い出したい」

だから、決断する。

封じ込めた記憶の向こう側。そこにいったい何が待っているのか、知らないが。

それでも忘れちゃいけないことがある。

きつと、なくしちゃいけないものがある。

「わかった」

兄は、手を振った。

「大丈夫さ。オマエは間違えることはない」

だって、と続け。

「大事なものは——手放さなかったんだから」

気づけば、オレの手の中には、四つ折りのメモ用紙があった。

既視感。

メモをゆつくりと開いて、その中身を見る。

「……ははっ」

ついつい、笑ってしまった。

そうだ。そうだよな。

あいつはそういうことをする。それがたとえば、どんなに緊迫したことであろうとも。

だからこそ、あいつは——。

『——オマエ、結局何がしたかったの?』

頭を抱える。

すべて思い出した記憶。

その中に、爆弾があった。

それは決定的な亀裂。

選択を強いられる一つの終わり。

夢の終わりが、現実の始まり。

だからオレは選ばなければいけない。

夢か、現実か。

人生なんて適当に生きて、適当に死ぬものだと思っていた。

適当に大学に入って、適当に仕事に就く。

そういうものだと思っていた、量産型高校生のオレに——その選択はあまりにも重たすぎる。

「……はっ」

自嘲。

手の中にあるメモが、少しだけくしゃりと歪んだ。

「ふざけんな、馬鹿。オマエはホントに大馬鹿だ。天才なんかじゃねーよ、バーカ」

どうしたらいい。
どうしようか。

この馬鹿みたいなメモをいくら睨みつけても、結論は出ることはない。

記憶を取り戻した。

それで終わり——ではなかった。

それで終わると思っていたオレにとって、冷水を浴びせられたかのような、そんな。

ぐちやぐちやの頭で、からからの喉で、オレは言葉を零した。

亡者のような声だった。

「——浮かれた馬伊野幸人／五条祈 鹿は死ぬ

馬鹿なりの結論

「——ふー……やべえな、これ」

時計を見る。

兄譲りの時計だ。

そこには時刻20:30とあった。

「電車はこねーし、電話は通じねーし、人でごった返してるし、とにもかくにも」

慌てふためいている人の中で、平然とレールの上に立っているヤツが、三。

普通に考えると今回の件の黒幕だろう。

何かが起こっている。

その判断はすぐにできた。

だからこそ警戒している。オレ一人が警戒したところで、何が変わるわけでもないが。

少なからず自分は生き残る可能性が生まれるかもしれない。

この緊張感の有無が、結果を分けるかもしれない。

とはいえ、オレが——オレたちがここに閉じ込められて、既に一時間半もの時間が経った。

それだけすれば、警戒している自分の気力もかなり削がれてくる。

「いかんいかん、緩んでる」

このまま何もアクションが起こらないままだと大変だ。

そう思つて、待つていたときのこと。

上から——人が降りてきた。

「これで負けたら言い訳できないよ?」

「貴様こそ、初めての言い訳は考えてきたか?」

そのやり取りは、よく聞こえた。

何かが始まろうとしている。

その気配だけは、敏感に感じ取れた。

そして。

「え」

落下を防ぐ仕切りが、突然空いた。

人でごった返した現状。

潰されるように、押し出されるようになっていた人だっているはずだ。

それが、落ちた。

そのまま人の波に流されて、オレも線路へと落ちる。

しかしながら、オレはすぐに降りてきた男の後ろへと回るために逃げる。

——瞬振り返った背後。

そこで、人が死んでいた。

「——つつっ！」

怖かった。

けれど、納得できた。

だってそれは予想できていたのだから。

何かが起こっている。

到底、オレなんかじゃわからないような領域で——何かが。

少しの間があつて。

「——正直驚いたよ」

男の声が響く。

それが今、恐ろしくもあり——頼もしくもある。

オレは、今この場において、この白髪の男に全幅の信頼を寄せていたのだった。

当然かもしれない。

物語である悲劇。

それを食い止めるために戦う主人公。

そういうものに、憧れてきたオレが——こうして、いざそれに類似した現場に立っている。

憧れか？ それともまた別のなにかか？

わからない。

わからないけど。

目隠しを取った彼に、オレは何よりも今——興味を惹かれていたの

だ。

そこから始まったのは蹂躪だった。ただの体捌きで腕をもぎ取り、三人いた中の一人を圧殺。相手の攻撃は彼に通用していない。

——すごい、と思ったのを覚えている。けれど状況は変わる。

それは電車が来てからだだった。

詰め込まれた、何か。

化物のように見えるなにか。

それが先頭の男を殺し——そして、溢れ出す。

怖くて、逃げた。

そして。

そして。

たった一人、未だ無傷で立っている彼をめぐがけて——全方位からの攻撃。

避けられない。これは死んだ。間違いない。

短い人生だった。そう思っ——足掻くのをやめる。

できれば痛くなければいい。そう思っ、目を閉じた。

「——アレ？ オレ、生きてる？」

「……っ！」

それは、ただの奇跡。

他人の血飛沫を浴び、臓物にまみれながら——オレの体には、傷一つついてはいない。

まさか生き残っているとは思わなかったのだろう。白髪の彼は、オレを見て。

そしてどこか得心したような表情で。

ほんの少しだけ、希望を宿したかのようにだった。

「うげっ」

そして彼に服の襟を掴まれる。猫のように持ち上げられたそのあとのこと。

「——領域展開」

——一瞬だ。

けれど、オレはその瞬間を目に焼き付けた。

そしてそのあと、彼は呆けて動くことのない化物たちを瞬時に殺し続け——そして。

「獄門疆 開門」

そんな声がする。

そして、彼は『獄門疆』なるなにかに身を覆われ——。

たった一人、戦える彼が捕まってようやくオレは気づいた。

世界に完璧なヒーローはいない。

絶対的に強かったとしても、万全の対策をされていけば……それこそ、親しい仲の人間を利用したりすれば、それで止められてしまうのが現実だ。

だから。

だから。——だから。

だから、何だ？

今オレにできることはなにか。

逃げる。

彼を助けるための、最大の方法は——彼のように、いるかもしれない強い味方を呼ぶことだ。

走って、駅を登っていこうとして、足が止まった。

腹に突き刺さった、巨大な腕。

「彼は……一体なんだい？ どうしてわざわざ無量空処から守った」

「ああ、こいつ脹相の攻撃食らって生き残ったやつじゃん。術士でもないのに。ひよっとしてこれ使ってどうにかしようとか考えてた？

残念だったね」

「ちっ」

首だけ振り返って、拘束された男を見る。

彼の名前は……なんだっけか。

ああ、思い出した、五条悟だったか。

あれだけ連呼されてればさすがに覚える。

腹はもう、痛みすら教えてくれない。手遅れなのだ。

それでよかった。

オレには特別な力なんてない。なにもできる余地なんてないのだ。それでも。

きつと、物語の主人公ならこんな状況でもどうにかしようと思っただろう。

——ああ、だからか。

なぜだか無性に、悪足掻きがしたくなった。

「ぼーん」

「？」

指を銃の形にして、頭に傷のある男に向けてみた。

当然一切効果はない。

何も起こることはなく、閑静な空間にオレの声だけが響く。

ややあつてから。

「オマエ、結局何がしたかったの？」

言葉は次に進まない。

体がぐにやり、と歪むような——いいや、これは魂だろうか。

——そして。

「——は？」

「どうしたんだい、真人」

「消えた」

「消えた？」

「魂が消えた！ 完全に！ 跡形もなく！」

そんな言葉を、オレは上から見下ろしていた。

意識はない。けれど、ある。

そういう不思議な状態で。

そのまま引っ張られていく。

理屈はわからない。

理由もわからない。

けれど、遠い視界の先でオレの体が爆発したのを見て——ああ、オレは死んだんだな、と。

そう思った。

死んだのなら、きっと転生がある。

そういうことを本気で信じていたわけじゃないけれど。

もしも本当にそんなことがありえるのなら、一つだけ願いを叶えてほしい。

できたらでいい。

来世は、こんな終わりにならないように——そうだ。五条悟を助けることができるように。

それがオレの人生最後の願いだった。



——五条祈は、オレの祈りの果てだった。

そういうことだ。生まれる前に死んだ彼女は、本来歴史の表舞台に上がることもない存在だった。

しかしおそらく、オレの術式が暴走して魂が過去へと吹き飛ぶ。

ひよっとしたら、神様なんでものがホントにいて、手伝ってくれたのかもしれない。

そしてオレが抱いた願いをもっとも叶えられそうな器に入り込んだ。

それがオレが五条祈として目覚めることができた原因。

オレの意識がほとんど残ってなかったのは、オレの魂が真人と呼ばれる男の影響で破損していたからだろう。

そして記憶の領域は完全に破損しつつも、なお、オレは再び意識を取り戻した。

それが答え。

思い出せばすべてが簡単だ。

この世界はきつと、オレが作り出した未練だ。

夢。

幻にすぎない。

けれど、見ようと思えば朽ちるその日まで、この幸せな夢は続いていく。

渋谷で起きたあの事件がなかったことになったかのように、オレはオレとして生きていくことができる。

——オレとして？

それって、どっちだ。

伊野幸人として生きていくこと。

五条祈として生きていくこと。

そののどちらが、本当のオレなんだ。

「——悩んどるよーね」

声が出た。

扉を思いっきり開いて登場したのは——

「——ば、婆ちゃん!？」

本来この家にいるはずのない祖母だった。

◇

「ユキ。……いや、祈って呼んだほうがいいかな」

「……婆ちゃんがなんでそれを」

「知らん。これに関しては、ユキがそれだけ私を強いと思っとなんかことやと思う」

「え、ええー……」

どういふことだよ。

「——ユキは、どうしたい？」

「どうしたいって……」

どうしたい。

どうしたいか。

オレは——

『兄貴はさ、いなくならないよね?』

『——ユキがさ、生きててくれてほんとによかったって思うんだ』

オレは、どうしたいんだろうか。

夢とはいえ、オレが死んだとしてこの世界から出ていくこと。

現実に二度と戻らず、五条祈が死ぬこと。

そのどちらを取るにしても、選択は悲しみを生む。

オレがオレにとって都合のいい夢を見ないということは、この家族にオレが死んだことを突きつけるということと同義じゃないか。

オレが生きていてくれてよかったと。

顔を見て、泣きそうになるくらい思ってくれる家族なんだから。

「ユキ」

「……なに?」

「舐めとんちやうぞ」

婆ちゃんの言葉。

顔を持ち上げる。

祖母は、笑っていた。

まるで兄のように。

「離れてても、まったく別人になっても、ユキは生きとーやろ。私らにとってはな、それで十分なんよ」

「……………」

喉の奥が詰まって、言葉が出てこない。

「……それ、マジ?」

「マジもマジ、大マジよ。」

——答えは出たみたいやね」

握りしめたメモ。

祖母を見返すオレの視点は、さつきよりも明らかに低い。

「——うん」

これがオレの答え。

オレの心が、そう許しを求めて。
それを婆ちゃんという形で正当化したのだとしても。
それでも、いや、そうだというのなら――
――オレの心は最初から決まっていた。



「……………ユキ。その姿は」

「父さん」

声はまるで、年若い女子のようなものになっていた。
いや、実際にそうなっているのだ。

オレの姿は、もう伊野幸人のものじゃない。
五条析のそれだ。

「……………」

「……………」

互いに無言で、間ができる。

「……………最後に」

父は言った。

「みんなで食事をしないか」

「……………うん」

そう言って、リビングに向かう。

そこにはもう全員が揃っていた。

まるでこうなることを予期していたかのようだ。

いや、祖母がすでに伝えていたのだろう。

祖父の姿だつてある。

母はどこか淋しげに、それでも口元に笑みをたたえ。

兄は軽薄な笑みを崩さずに。

祖母と祖父は、既に必要なことは言い終えたというふうな顔で。

妹は、何がなんだかわからないような顔で。

弟は、涙を貯めてこちらを睨んでいた。

そしてオレと父が席につく。

テーブルには、既に料理が置かれていた。
皿の準備も、箸の準備もばっちりだ。

オレの皿には、コンビニの景品で当てたマスコットキャラクターの皿。
皿。

これに関しては母と、そして妹だけ固定の皿がある。
箸だってそうだ。

大量に買えて安いものではなく、オレの箸はキャラクターのプリン
トがある以外はやけに立派な、黒いもの。

家の思い出を数えれば、それこそいくらでもある。
きつとそのぶんだけ、未練もある。

「ユキ」

「ん？」

兄に声をかけられた。

生姜焼きを皿に引っ張ってきたオレは、動作を止める。

「オマエは今、幸せか？」

「……」

——今の生活。

五条悟がいる生活。

基本的に呪力の特訓をして、いろいろと試行錯誤したり考察して。

家の用事なんかもして。

同居人の身勝手さに腹が立つこともあるけれど、それも含めて楽し
んでいた自分がいた。

「うん」

「それならいいや」

と、兄は笑った。

笑顔だった。

オレが兄貴と会える季節は、長期休みのときのみ。
だけど、行こうと思えば会える距離だ。

あのときああしてれば。

後悔はいつだって残る。

今更しても遅いと思っただけでも、それはやまない。

だから、思い出はちゃんと手に持とう。

二度と戻れないけど、思い返すように、本のページをめくるように、一つ一つ数えられるように。

大丈夫。ちゃんとできる。

だって、この味も、記憶の中だというのに鮮明だ。

「……ねえ、ユキ」

今度は母親の声だ。

「結局オマエの口からさー。何をやりたいのか聞いてねーぞ」

「……それ、言葉にしようとするの恥ずかしいな」

「やっぱそんな美少女なってるんだし、お嫁さんとか？」

「違うわボケ」

成り行きでそうなりはしたけれど。

オレのやりたいこと。

オレの夢。

それは、きつと。

「そうだなー……強いていうなら、オレはヒーローの仲間になりたい」

「へえ？」

にまにまと笑う母親。

「いくらすごいヒーローでも、背負うものが多いと潰れるらしいからな。だから、それを持つ手伝いをするヤツ」

「いいじゃん。応援してるよ。——そしてそのヒーローは、もう見つけたんだね？」

「……まあな」

「そっかそっか」

誤魔化した言葉の中に、照れて言えないようなことがあったのだから。

母親にしては雑な返しだ。

けれど、むしろそれが心地よかった。

「兄貴」

「……どした？ 洞爺」

「……オレじゃ、駄目なのかよ」

「……………」

「オレ……絶対にヒーローになってみせるから……それじゃ駄目なのかよ」

「……なってほしくないなあ、オレは。」

「どんなに強いやつでも、助けられない命があるんだぜ」

「そうだ。」

「五条悟は全員の命を助けたわけじゃない。」

「最強であっても、どうしようもない事態はある。」

「明日」

「震えた声をする。」

「明日じゃ、駄目なのかよ……モンハンも、ポケモンも、まだまだ全然遊んでないじゃんか……」

「……ごめん」

「約束したじゃんか、いなくならないって」

「ごめん」

「ごめんじゃねえよ」

「……ごめん」

「弟を抱きとめた。」

「いつの間にか大きくなっていてる体は、今のオレの体より少し小さい程度。」

「小さなぬくもりが、オレに伝わってくる。」

「小さな雨が降る。」

「それがオレを濡らしたけれど、嫌な気持ちにはならなかった。」

「手元にあるものは、全部食べ終わっている。」

「そして、皿の上のものも既に捌けた。」

「——時間だ。」

「……………どこに向かうんだい？」

「父親の声。」

「東京」

「駅まで送るよ」

「わかった」

立ち上がって、玄関のほうに歩き出す。

後ろの嗚咽は振り切った。玄関で、靴を履く。

祖母が背中を叩いた。

振り返ると、祖父が頭を撫でた。

溢れそうになる何かを、ごまかすように深呼吸。

「おにーちゃん、行っちゃうんだ」

妹が出てきた。

手を伸ばして、頭を撫でると、まるで猫のように目を細める。

自慢の妹だ。

「——いつてきます」

そして、もう戻ることはないだろう。

父親が扉を開けて、そのあとをついて体を家から引き離れた。

「いつてらっしゃい」

父親以外の、全員の声。

伊野幸人との、別れの声でした。

「……ユキ」

「……どしたの、父さん」

「僕たちのことは、忘れていい」

——歩きながらの会話。

「なんでそんなこと言うんだよ」

『伊野幸人』である時間は、僕たちの前だけだ。

これから先、君は『五条祈』として生きていく」

「それは、そうだけど。でもみんなのことを忘れるなんて、そんなことはありえねえよ」

「でも、二度と会えないんだ。そして遺せるものもない。

『五条祈』の家族は僕たちじゃない。だからこそ——君はこれから、新しい家族のことを知るべきだと思う」

「……オレの家族は、もう決まってるんだわ」

伊野幸人として生きてきた人生が、オレを形作っている。そして、五条祈として生活した期間というのは一年ほど。だから、オレの家族は、この伊野一家と。それから――。

「忘れないし、向こうの家族だって好きでいる」

五条悟。

オレにとって、唯一の『五条祈』としての家族。

「悪いところばっかあげちゃうけど、いいところだって10個余裕で挙げれるんだ」

「……そっか。――あーあ、会いたかったなあ、ユキの好きな人」

「な、なななっつ別に好きとかそんなんじゃないんだけど!？」

そもそもオレは男だ。

何いってんだ。と、そういう話をしていたら、駅についた。

「――じゃあ、いよいよさよならだ」

到着した電車に乗って、手を振る。

父親は、いつもと変わらない優しいげな笑みを貼り付けていた。

「元気でな。長生きしてくれ」

「それはこっちだって同じさ」

扉が閉まる。

その、最中。

「――生まれてきてくれて、ありがとう、ユキ。

君とまた暮らせたこの日々は、こんな幸せは――」

その先は、なんと言ったのか。

閉まる扉。最後の最後で戻りかけた体が、阻まれる。

そのまま、誰も乗客のいない電車の床に崩れ落ちた。

そして電車は走り出す。

父の姿を遠くに置き去りにして。

ずーっと手を振っていた父は、その姿が見えなくなる間際、その袖で何かを拭っていた。

「……………」

また、と言ったか。

それはオレの都合のいい幻想かもしれない。

オレが、ただそうであってほしいと思った結果かもしれない。

それでも、それでもだ。

「……父さん……みんな……」

ぼつり、と、雨が降った。

それが座席のシートに落ちて、目の前が見えなくなった。

これでお別れだ。

——そう。

本来、死人は話すことはできない。

だから、生者とこうして、話し合うことはできやしないのだ。

けれど、オレは。

ぼつり、ぼつりと雨が降る。

大事な思い出は、全部オレが抱えている。

だから、大丈夫だ。

電車は進む。

戻ることはない。

駅から発つのは、死人だけ。

もう行き慣れたスーパーには、いつもの店員さんはいなかった。

そのまま歩いて行って、高専へと向かう。

慣れた道。

既に、何度も通った道。

そして、たどり着いた。

東京都立呪術高专学校。

いつもどおりのルートを歩いて、彼の部屋へと向かっていく。

「——アレ？ 伏黒、あれ誰かわかるか？」

「いや、見たことない。五条家の人かもな。」

高専結界が働いてないってことは関係者なことには間違いないだろ」

「え、五条先生の親戚!? マジ!? 俺ちよつと行ってくる!」

「あつ、おい……!」

そんな声が聞こえてきて、その方向を見る。

今の高専生みたいだった。

「ちわー! なんて名前っすか!」

「えーと、君は?」

「俺、虎杖悠二つていいいます! こっちは伏黒恵!」

「……こんちわ」

「おー、こんにちわ。オレは——」

オレの名前は。

「五条祈です。ところで質問ですが、五条悟はどちらに?」

「あー、どこだろ! 伏黒わかる?」

「任務に出てるわけじゃないので、……そうですね。ひよつとしたら医務室のほうにいるかもしれません」

「おー、ありがとうございます。それでは!」

家入さんのところか。

それならばわかる。

走る。

手にはメモ帳。

そして廊下を駆けて、

「——ふぎやつ!」

「ん?」

横合いから出てきた相手と激突した。

「あれ、君——」

「いた! 喰らえばかやろー!!」

いやがった、五条悟だ。

見たときから、ずーっと決めていた。

このメモ帳は、きっちり顔面にぶちかましてやると。

「ん、これは」

しかし無限に阻まれ、手に持っていたものがびたりと固定される。それを手にとって開いたヤツは、「ふっ」と吹き出した。



「——いたっ」

叩きつけたのは顔面だ。

ばしん、と手に持っていたメモ。その中身は、夢の中で知っている。

「あっはは、読んだのかい?」

「……夢の中で」

「ふうん?」

といつつ、内容が違っていたらあれなので開いて自分で一度確認しておく。

そして、もう一度悟の顔面に叩きつけた。

「いてっ」

「もー! もー! 死地に赴く嫁に渡すのがそれか!」

「いやー、ごめんごめん。つい出来心でね」

と手を合わせて謝ってくるが、決して許す気はない。

そもそも女子に渡すものではないだろう。

「——おかえり、祈」

「……ただいま。悟」

とにかく。

オレは、ようやく現実に戻ってきたのだった。

祈の祈り

「んぎーんぎぎー」

「ほら、がんばれがんばれ。はやくリハビリしないと留年扱いになっちゃうよ?」

「無茶をつ、いうなよ……っ」

呪力で筋力を誤魔化せど、流石に元が弱すぎるとなるとそれを補う呪力が勿体ない。そして呪力による強化はある一定で頭打ちになるので、純粋なフィジカルタイプとの相性が致命的になる。

生活するだけならば十分以上なのだが、しかしせっかく高専一年として受け入れられたのだ。

がんばらないといけない。

現在、十六歳。

そして今年の冬に十七になる。

ということ——オレは、まるまる二年の間を眠っていたのだ。

ちなみに体は成長していない。

世紀の美少女たるオレがこの幼い姿のままでもいいのかという思いと今のオレを長く楽しめることに対する喜びがせめぎ合って心が迷子になってしまう。

ともあれ現在筋トレ中。

少しづつ衰弱した体は活力を取り戻しているような、そんな感覚になってくる。

「いやー、強化してもこんなに筋力ないんだね。ウケる」

「何一つウケねえよ……」

腹筋、五回。

背筋、二回。

腕立て伏せ、ゼロ回。

懸垂、二回。

そして出来上がったのは汗をだらだら流してだらしくも床に肢体を投げ出した、美しすぎる死体。

体がいかに衰弱しているといっても、ここまでとは思わなかった。

この体はそんなに筋力がなかったらしい。呪力で元の体の調子くらいまでに強化してこれなので、オレのぷにぷになの腕の実力が図り知れるというものだ。

はい。

でも前はこんなにひどくなかった。これは筋肉が衰弱しているせいだ。

そうに違いない。

いくら呪力で強化しようが、人の筋肉は限界を越えた駆動には厳しいのである。

きつとそういうことだ。

「はー、マジで服びしょびしょ……」

現在の季節は夏。

室温は20度後半だ。

30度に差し掛かろうとしているほどで、この間まで冬を生きていたぶんも相まって、嫌なくらいのあつさに感じる。

寒いよりは全然いいのだが、こうして汗をかくと体に衣服がはりつくのでやっぱり夏も嫌いである。

ということ、汗をびっしょりと吸って気持ちの悪い上服を脱いだ。

覆われていたお腹が外気に晒される。

へそに溜まった汗が、体を丸めるときに押し出され、そして流れていった。

タオルでその汗を拭う。

そこで、悟の視線に気づいた。

「どした?」

「いや、仮にも女子なんだからもっと恥じらい持ちなよ」

「……ふーん?」

にんまり。

「何その顔。言っとくけど、僕は祈に対してそういう感情を抱いてないからな」

「えー? マジで? じゃあこれはどう?」

言いつつ、下着を少しずらした。

そして近づいて、その手を肋骨のあたりに触れさせる。

「これでもっ…」

「全然、まったたく、微塵も、ずえーんぜん」

「ええー」

本当に全く性的感情を抱いていないみたいだったので少し拗ねる。子供か、と思うけども、しかしながらこの体は最強の美少女のもの。そういうそっけない反応をされるのは少しショックである。

「ガキにしか見えないから、需要と合ってないんだよ」

「ちよっ……やめろー！ 腹を撫でるなー！」

脇腹をつんつんと突っつかれる。

これは伊野幸人であるときから苦手だった。

あまりのくすぐったさに、びっくりして体が跳ねる。

「そもそも僕にとって祈は妹みたいなものだから、そういう目で見ようがないっての」

「え、でも五条家つてオレとオマエの子供に期待してるって……」

「……そのとき考えよっか！」

おいそんなのアリかよ。

いや、まあ、体外受精とかもどんどん一般的になっていくみたいだけど。

しかしそれならそれで、オレが体を許せる相手なんていうのはきつとコイツくらいなので処女懐胎ということになるのでは……。

この件については今後考えればいいか。

そう思っつて、オレはぼん、と手を打った。

オレの意識が覚醒したのは、おそらくオレが元から備えていた術式：「反転」の効果によるものだ。

冷静になって考えてみると、自らの死亡が確定した状態で、自らの体の放棄という条件をきっかけに呪力制限を解除して——そして、自分の時間の流れに対して術式をかけたのがきっかけだろう。

本来ならば自分自身を巻き戻すだけの効果であったそれは、自分の肉体を喪失したために魂が過去へと引っ張られた。

けれど、過去の時間軸のオレの体には魂が入っている。なのでそこに収まることはできない。

遡り続ける中、オレが入ることのできた器が——あるいは、オレが望んだ器が、五条祈だった。

あの渋谷内で、非術士だったオレが術式に目覚め、そして一体なんの偶然か呪力を扱え、無自覚ながらその術式を扱うことができたことによる奇跡。

まるで冗談のように出来すぎて、物語のような奇跡で、見ているこちらが未恐ろしくなるような、そんなもの。

そしてその術式は今の今までオレの中で眠っていた。

それが、記憶をたどることにより、いよいよ明らかになって。

この現実を選んだときに、オレは再び術式を呼び起こしたのだらう。

そうして覚醒した「反転」の術式は——なんというか、ガチャで言うならばSSRのようなレベルの、インチキ術式だったのだ。

「——領域展開」

途端、呪力が体からごっそりと消えるような感覚。

けれどオレは呪力量だけが取り柄なので、ゴリ押しで「反転」も回しながら展開を続ける。

二つの術式を同時に使うのは、虚式「 \square 」を使っているうちに慣れた。

——そして、呆けて動けない特級呪霊を「 \square 」が葬り去る。

領域が解除されて、ため息を一つ。

そしてなんとはなしに呟いた。

「やっちゃってるなあ、これ」

Q. 術式ガチャSSRに術式ガチャSSRを重ねるとどうなる？

A. ぶっ壊れ。

つまりはそういうことだ。

止める力である無下限呪術はないが、そのかわりに領域展開を安定

して出せるようになったのだった。

そしてその状態でも「☒」を使うことは可能。

かくして相手の動きを止めてから確実に葬り去ることのできる最強アタッカー・五条祈ちゃんが誕生したのである。

ちなみにこれでも悟はオレより全然強い。

インチキありのオレより数段強いとかあいつやっぱりなんかおかしいよ。

「——おつかれ、祈」

「疲れた。おぶって」

「え？ まだ任務あるけど」

「……は？」

「だって祈、僕には遠く及ばないけど……遠く！ 及ばないけど！ 特級になったじゃん。」

だからほら、任務はたくさんあるんだよ？ 休んでる間に溜まったやつが。こんなところで遊んでる暇はないって」

「……まあ、たしかに、そうだけど。で？ 次はどこ？」

「香川」

「遠っ!? 地方の連中に任せとけばいいじゃん!？」

「まあまあ。行きは送るから。あ、でも帰りは自分で帰ってきてね」

「……は、はあ……!？」

ちゃんとそっちのほうの呪霊も祓った。

電車に揺られ、家についたのは大体十一時頃。

あのあとどうにか即日で帰れるものを発見した。

電話したら帰りも迎えにきてくれるのかと思いきや全然そういうことはなかったのでキレそうになりながらようやく高専まで戻ってくる。

「ただいまあ」

と、部屋に入ったタイミングで、

「おかえりー!!」

と、返事がきた。

「……………」

漂つてくるいいにおい。

それに惹かれたので、靴を揃えて脱いで、そして部屋に入る。そこには、大量の料理が置いてあった。

部屋はいろいろと飾り付けをされている。

そこに書かれていた文字を読む——『五条祈復帰祝い』。

テーブルの中心には、大きなプレゼント箱が置かれていた。

「——わぁ……」

「どう？ びっくりした？ 急いで準備したんだぜ、ほら褒めて」

「すごい。ありがとう」

「うおっ、めっちゃ素直」

そりゃあ、オレだっていつもキレイているわけではない。

こうしてオレのためにやってくれたことなのだから、それを褒めないでどうするというのだ。

ということで、まずは食べることにした。

手を洗ってきて座る。コップにジュースを注いだら、テーブルの上に準備されているもののどれを取ろうかと視線を回す。

ううむ。ケンタッキーなんてあんまり食べる機会がなかったからすごく新鮮。

こういうジャンキーなものは嫌いじゃない。

祝っているという実感が湧くから。

「——ごちそうさまでした！」

「それじゃ、行こうか。——プレゼントの時間だー！」

「わー!!」

と、いうことでテーブルの上に置いてあった箱が差し出される。

「開けていい？」と視線で問うと、頷かれた。

「あけるよ？ いくよ？ セーのっ……わひゃあ——!？」

「……ふ、あはははははは！ マジで引っかかった！」

「こ、このやろ……！ このやろ……！」

「本物はこっちだって、ほら」

本当かなあ。

ちなみにさっきの箱を開いた瞬間飛び出してきたのは学長の呪骸だ。

かわいいのやらブサイクなのやらと判断に迷うそれが音付きで飛び出してきたら誰だって同じくびつくりすると思う。

そして次の箱が差し出された。

今度は比較的小さめだ。

「大丈夫だよ。流石に二回続けてやるとサムいでしょ？」

「あー、それもそうか」

なら安心だ。

悟はちゃんと「面白い」のセンサーを持っている。

冷めるようなことはしないはず——！

『ちんこ』

「赫」を使ったオレはきつと悪くない。

プレゼント箱に入っていたメモ用紙を破りつつ睨む。
同じことを二回するのはよくない。まったく、もう。

「ごめんごめん、本当はこれ」

と、言つて渡されたのは3DSL。L。

それとポケモンXにモンハン3G、そしてこの時代だとい先日発売されたばかりのモンハン4。

「祈、なんだかんだゲーム好きでしょ。時間があるとき一緒にやろうぜ」

「……おー」

大丈夫かな……。

まだ解放してないテンプレ装備とか、うっかり口を滑らせちゃわな
いかな。

そう思いつつ、それでも。

「えへへ、ありがとう」

五条祈になる前に散々やったゲーム。

これでさつきまでのいたずらが許せてしまうなんて、ひよつとしたらオレはかなりチヨロいのかもしれない。

「あ、どうする？　せつかくだしお風呂一緒に入る？」

「えー、ロリコン扱いされそうだから嫌」

「ふふ、わかった。さつさとお風呂洗ってくるね」

「ん、よろしく」

とりあえず、この大量の荷物をテーブルの上に置かせてもらうことにする。

そのあと、のんびりと過ごして——眠り——朝。

目を覚ますと、枕元に手紙があった。

「……んー？」

部屋には気配がない。

時計を見ると、まだ六時だ。

朝にするにはまだ早い。

手紙を読むことにした。

暗いけど、それでも読むことはできた。

「……もー、あいつつてばさー」

まったくもって、本当に子供みたいだ。

こうしてじゃないと、気恥ずかしくて明かすことができないこと。

きつと、これが彼の本心なのだろう。

それでいい。それがいい。

そうであってほしかった。

これからきつとオレたちは、忘れてしまう。

大事なものを全部手に持とうとしても、その重さに落としてしまうこともあるだろう。大きすぎて持ちきれないこともあるだろう。

だから、大事なことを一つ一つ、じつくりと噛み砕いてのみこむみたい。

なるべく多くのだいじなものを、なくさないように、とっておきたいと思う。

それができるのか、できないのか。

結局のところ、そのときになってみなければそれはわからない。

呪術師に悔いのない死はありえない。

オレだって、いつかは後悔の果てに死ぬかもしれない。

けれどどんな生き方をしていたところで後悔はするものだ。

オレはそのことを、よく知っている。

だからそのとき、少しでもよかつたと思えるように。

自分は幸せだと胸を張れるように。

オレなりに小吉や中吉を拾い上げて行って、時たま大吉なんか拾えたら——それを大事に、大事にかかえて。

結局のところ、遠い未来に渋谷で起こった事件が発端で始まった、オレと五条悟の奇妙な共同生活は、いつまで続くのか、円満に続くのか、いつ破綻するのかわからないわけで。

それこそちよっとしたボタンのかけちがえのように明日には元通りにならない日常があるのかもしれない。

いくら最強といえども、その心までが最強であるなんてことはない。彼の心が押しつぶされることだって、当然あるだろう。

だからこそ、なるべく長く一緒にいたいと思った。

隣で支えていきたいと思った。

前世の幸せな夢を捨ててまでも、オレが戻ってきた現実が、少しでもよくなりますように。

この暗く澱んだ世界に、一筋の光と我儘を通せますように。

この世界が、オレの家族が、悲劇なんて取っ払ったたくさんの幸せで包まれますように。

そんな、子供が描くような穴だらけで夢だらけのそんなことを祈る。

心の奥底ではそんなことにならないと思っている。

難しい、と、世界は無数の悲劇だらけだ、と、そう知っている。

——それでも、この子供のような想いを現実にできるように、と。オレが今生きるこの現実にとこしえの夢を籠めて、だいじに、だいじに祈っていたい。

あとがき

私は自分をかなり厄介な呪術オタクだと思っています。

ですので、正直な話をするとおそらく自分が執筆してなければこのお話は読まなかったと思います。

この作品を呪術作品と呼ぶことすら鳥澁がましいし青評価くらいくるんじゃないかとまで最初の段階では思っていました。

ですが、一番最後まで執筆し終えた今となつては呪術作品とは呼べませんが、少なくとも作品としては納得のいくものになつたなと思います。

呪術二次のセオリーやらなんやら投げ捨ててほんとにすみません！

翻つてみるとこんな感想になつたのはおそらく、最終章をいざ形にすることで、自分の中でも靄がかったいた「五条祈／伊野幸人」という高校生がようやく等身大になつたからだと思います。

伊野一家の執筆はすごく楽しかったです。

幸人くんの一喜一憂、悩み、苦しみ、渇き——それを、一番近くで見ているからこそそれぞれのアプローチがあるんだと思いつながら、終盤に向かうにつれて自分自身にお話が突き刺さっていききました。

ですので、書き始めは個人的にかなり地雷混じりだったこの物語は、私の執筆してきたお話の中でも特にお気に入りになりました。

短い期間ながら、祈ちゃんとは私にとって大事なものをくれたような気がします。

・五条祈（伊野幸人）

なろう系をこなよく愛するTS少女。

初期の彼女がナチュラルにイカれてるのは、自分のいる現実を夢のように思っているという理由があります。

あと、記憶が消耗しているから自分が「こうしたい」と思っていた行為をそのまま表に出せてます。

14話で主人公が「馬鹿でありたい」と言っていたことが前面に出

たのが五条祈です。

本編が終了するからっていうので最終話でヤケクソ強化されたね。メルクオリア・プロトコルかよ。

というのはさておいて、この子に関しては「転生モノの主人公がこの子でなくてはならない理由」というのをしつかりと意識して執筆しました。

まあ最初はそんなのあんまり考えずに、飄々とやってたんですけど……。

ともあれ、彼の設定をちまちまと明かし始めたのは6話からですね。

現在が2021年にもなろうとしているというのに、主人公の知っている記憶を2018年に設定したというのはこれが原因です。

これだけだと呪術廻戦一巻の単行本が発売されたのが2018年っていうところで、原作を深く知らない転生者というアピールもとれるかなーと思いつながら、この情報だけを放流しました。

次に私が覚えているところで意識して出したのは、12話の領域展開のところですよ。

なぜか五条悟が領域展開しているシーンを知っている、というところですよ。

ここで鋭い人は気づいたんじゃないかなーって思います。

嘘です。情報少なすぎますね。

それから祈ちゃんの回想に入りました。

これに関してはなんで領域を知っていたのかをすぐに解説しないとご都合主義で片付けられるかなーと思ったからです。

ということ、このあとはもう決定的な伏線を散りばめていくだけです。

評価って形で意見が可視化される以上、覚醒的な展開においては、長期的な伏線が仕込み難いっていうものがあります。

私の場合なんかは物語の構成力がよわよわだし、描写もやけに淡泊になってしまうので余計にですよ。文章力ください。

なので、終盤はもう畳み掛けるようにいきました。

おかげで一氣に詰め込むことができ、執筆している側も楽しかったです。

このラストの章で祈ちゃんへの理解が深まるのかなあとか。

祈ちゃんに最後突きつけられたものは、「自分のために他人を傷つけていいのか」の亜種のようなところだと思っています。

祈ちゃんが現実に戻るということは、「伊野幸人」という個人の生存をなにより愛して喜んでくれる人に対して「本当は自分は死んでいい」と告げることと同じなわけです。

あの家において生活することは、彼女にとってはすごく幸せなことだと思います。

実際彼女も父親の最後の言葉によって夢を選ぼうとしましたし。

でもそうすると、彼女が今際の際にようやく見つけることのできた「やりたいこと」を放棄することになります。

だから彼女は選ぶことを迷っていました。

けれど、弟くん以外の全員、いや、彼も含めて全員が、彼のやりたいことを何より大事にしてほしいという思いを持っていました。

その後押しによって、現実に戻るといふ決心ができたわけです。

このエピソードに関しては、文章がひとつひとつ出来上がっていくたびに涙をこぼしながら執筆しました。これは自分自身の思い出を振り返りながら書いたついでというものもあると思います。

頭の中の映像を完璧に共有できるわけじゃないのが残念です。もつとアウトプットの力を高めてきます。

・伊野豪太

主人公の祖父です。

基本的に豪胆な人。

主人公とあまり喋る機会がなかったのは、彼は最初から主人公が死んでいるとわかっていたからです。

二度と会えない人とは喋るべきではない。

お互いに未練が残るから。

それでも餅をつこうと提案したりだとか、最後に頭を撫でたのは、

孫と最後の思い出にするつもりだったからでしょう。

・伊野純

主人公の祖母です。

つよつよばあちゃん。

彼女の言葉は、主人公にとって大きな意味を持ちます。

母親はなかなかアレな人ですし、父親もあれ。

物事は基本的に「誰が言ったか」で受け入れられるかは変わりますし。

ところで彼女は主人公が恋をしていると思っています。

つまりはまあ、そういうことです。

・伊野緑次

主人公の父親。

一番偉いのは誰かって言う話をしたら思いに優劣をつけるようでありづらいんですが、それでも挙げるとするなら彼だと思えます。

たぶんこの一家の大人の中では一番メンタルが弱いというか、まあいわゆるなよつとした感じの父なので。

特に主人公に関しての話題を率先して出していたのは彼になります。

それだけ主人公のことが大事だったし、できることならばずっとこの夢の世界に縛り付けていたいと思ったことでしょう。

引き止めたい気持ちを抑え。

言葉で呪わないように気をつけて、

それでも最後は、永遠の別れになってしまうから、本心を告げる。

それが呪いになるかもしれない、と思っただけでも、口をついて出してしまう。

それでも彼は、ちゃんと主人公を送り出したんです。

・伊野うず

主人公の母親。

パワーが強い系のオラオラな感じの女性。
かなりハチャメチャなところがあります。

わりと明け透けに話すところが多く、特に息子に対する好意なんかは直球で告げてましたね。

「夢を追え」って直球で最初から伝えていました。

主人公が現実に戻るきっかけのひとつに間違いなくあると思います。
す。

・伊野薩摩

主人公の兄。

五条悟とはまた別のベクトルでウザい系の兄です。

チャラ男……？

彼に関しては主人公の名前の由来を語ってくれる人でしたね。

主人公との思い出をひとつひとつ背負っていた人でもあります。

距離が近いぶんいろいろとね。

主人公が今を幸せと言ってくれたことは、きつとにより嬉しかったと思います。

彼はそういう人です。表に見せることはあまりないですが。

・伊野洞爺

主人公の弟。

彼だけが、主人公を引き留めようとしてました。

そりゃ当然で、折り合いがつかくわけないんですよ。

それもよく一緒に遊んでくれた兄と永遠に別れるとなれば。

・伊野瑠璃

主人公の妹。

すごく幼いイメージです。

主人公が死んだっていうことも、きつとよくわかっていません。

だからこそ、彼女は主人公をすんなり送り出せました。

作業用BGMも相まってここらへん涙で机をばたばたにしながら

書いてましたね。

家族の面々に関してはいいたいこんな感じですよ。五条悟はだいたいの原作と変えることはなかったんで特に語らないでもいいかも……。

家族のお話を主軸にするのは最初から決めてました。

五条が「関係性は呪いだ」と言っていたように、家族関係について祈ちゃんは悩むことになりました。

家族っていくら仲が悪くても、嫌いでも、それでも離れてたって家族なんですよね。

呪いみたいなものだなあと思います。

だから、祈ちゃんにかかった家族の呪い。

それを家族が解く……そんな感じの展開になりました。

でもすべての問題が全部解決するわけじゃないです。

全員どこかで妥協してます。

それでもこの選択が最良だったと、そう思えるような、思いたいような……。

そんなお話。

ちなみに小ネタなんですけど、それぞれの名前の一番最初の文字を抜き出してつなげると「ごじようさとる」。

つまり「五条悟」になります。

はい。

物語のキーになったのがち○こなのがなんとも言い難いですが、まあタグに「じゅじゅ○んぽ」ってあるし……。

はい。

ということ、だいたいこんな感じのお話でした。

ちなみにこれ、警告タグをいくつか詐欺ついています。

具体的には「神様転生」と「転生」ですね。

死んで生き返ってるので転生はありかも？

主人公の主観では神様転生だったし、ということだなにとぞ。

主人公の術式ずるくない？ っていうのは「はい……」です。

私もやりすぎでしょとか思ってます。
チートオリ主にする気はなかったのにチートになってしまった。
そのせいでラストやけくそに強化したわけではありませんが。
はい。

あとこれだけはネタバラシしておきたかった。
三話に関して!!

なんとセリフが五十音順になっております!!

…：は行以外。

は行の存在を完璧に失念してました。

そしてその次の四話です。

なんと文中に「は行」、つまり子音が「h」「b」「p」の文字を使っ
ていません!!

確認しましたがそのはずです。

なので誤字報告のときに「頭をかしげる」↓「首をかしげる」って
いう修整が入りましたがすみません……。日本語としておかしいっ
て思っつていっつも適応できませんでした……。

本当にごめんなさい!!

これに関しては「感想で指摘されないかなーわくわく」ってしま
した。

あとがき執筆中現在、なかったです。

当然でしょう。クソほどわかりづらいですし。

でもなかったからってそれをアピールするのも違うなって思っ
たのであとがきまでネタバラシ禁止にしてみました。

存分にぶっちゃけて満足です。

これで「浮かれた五条悟は死ぬ」、本当の本当に最後の果てです。

ここまで読んでくれたみなさん、評価・感想をくださったみなさん、
更新の糧になりました。ありがとうございます。

お気に入り・評価・感想は必要ありません。

こんな最後の最後まで見てくれたというだけですごくうれしいの

で。

本当の本当ありがとうございました。
またハーメルンのどこかで会えたらいいな。それでは！